平成１９年度校内研修ハンドブック追補版

実践事例集

－授業研究の充実を目指して－

平成20年3月

京都府総合教育センター

本実践事例集の作成に当たって

１　作成のねらい

本実践事例集は、平成１９年３月に発行した校内研修ハンドブックの追補版として、授業研究の企画・運営の参考になる実践事例を収集し、効果的な校内研修が行われるための手法やヒントを学校に提供することをねらいとして作成しました。

授業研究を中身の濃いものにしていくためには、授業者自身が児童生徒観、教材観、指導観を見つめ直し、しっかりと練り上げた学習指導案を作成して、それをもとに事前研究・事後研究をしていくことが重要です。また、参加者全員が意見を出しやすい環境づくりにも工夫が必要です。

また、日々の授業を改善するためには、すべての教員が日々の授業を公開してお互いに参観し合い、率直に意見を交わすことが大切です。公開する授業が増えれば増えるほど、その目的に応じた方法を工夫して省力化と効率化を図らなければなりません。

本書は、授業研究を活性化、深化する上で校内研究を推進する立場にある先生方に是非とも活用していただきたいと思います。

２　構成について

本実践事例集は、校内研修ハンドブックのＱ＆Ａを生かし、その課題を受けて「こう実践しました」の形式で示しました。全体を「授業研究の方法」「授業研究の課題」「授業研究の展開」の三つに分類し配列していますが、最初から順番に読んでいただいても、各学校の状況に合わせて必要なページから読んでいただいてもよいように考えています。

３　実践例について

本書に掲載している実践例は、京都府内の学校からご提供いただいた実践や、京都府総合教育センター平成１９年度「小・中学校授業実践指導者養成特別講座」の受講者の発表内容を参考に作成したものです。言うまでもなく本実践事例集はヒントの一つであり、それが改善のためのベストの方策というわけではありません。今後、各学校において本書が活用され、京都府の授業研究や実践研究を進める一助になれば幸いです。

目　　次

ハンドブック版 Q・・

実践事例集 ヒント！

PART 1　授業研究の方法

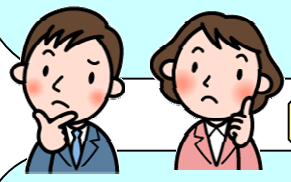
Q６　模擬授業には、どのような意義が？ (P11)
Q７　事後研究会での協議を深めるために？ (P13)
Q８　事後研究会で深まらないのですが (P15)
Q９　授業研究を深めるには？ (P17)

模擬授業を通して見えてきたこと →Ｐ１
授業研究を深めるために →Ｐ２
付箋を使い、授業研究の活性化をねらう →Ｐ４
授業研究を深めるための実践例 →Ｐ５

PART 2　授業研究の課題

Q11　教員の意識を高めるには？ (P21)
Q12　授業研究の共通理解を図るには？ (P23)
Q13　授業を見合う雰囲気づくりは？ (P25)
Q14　授業研究をスタートさせたい (P27)
Q16　効率的に授業研究会を行うには？ (P31)
Q17　授業研究に継続性をもたせるには？ (P33)
Q19　校内研修がマンネリ化しがち (P37)

教員の意識を高める取組 →Ｐ６
授業研究のための共通理解 →Ｐ９
全員そろって授業研究を行う例 →Ｐ10
年度当初　第１回目校内研究会までに！ →Ｐ11
授業研究をスタートさせるために(1)→Ｐ13
授業研究をスタートさせるために(2)→Ｐ14
授業研究をスタートさせるために(3)→Ｐ15
授業研究会のルール →Ｐ16
中規模校を想定した授業研究計画 →Ｐ18
無理なく研究会を実施する →Ｐ20
研究に継続性をもたせる取組(1) →Ｐ21
研究に継続性をもたせる取組(2) →Ｐ23
研究に継続性をもたせる取組(3) →Ｐ24
研究に継続性をもたせる取組(4) →Ｐ26
中学校における校区内小学校との小中連携 →Ｐ27



PART 3　授業研究の展開

Q20　研修を構想・計画する視点は？ (P39)
Q22　授業研究で教科の壁を越えるために (P43)
Q23　授業研究で教科の壁を越えるために（２） (P45)
Q24　授業研究で教科の壁を越えるために（３） (P47)
Q25　若年層の教員が多く、授業力の向上が課題 (P49)
Q26　教員個々への対処は？ (P51)

研究仮説の深化を目指した年間計画→Ｐ29
校内授業研究会実施計画の策定 →Ｐ31
教科の壁を越える実践例(1) →Ｐ32
教科の壁を越える実践例(2) →Ｐ34
教科・領域を越えた研究 →Ｐ36
教科の壁を越えた研究主題(1) →Ｐ38
教科の壁を越えた研究主題(2) →Ｐ39
隠されたベテランの技を若年層の育成に生かす →Ｐ40
一人一人の意識を高めチームで行う研究へ →Ｐ42

Q6を受けて 実践例

模擬授業を通して見えてきたこと
―各小学校で共通した授業展開のイメージを―

こんな進め方をしました

◎　年度当初の研究会で
◎　授業者は、これまでの研究の経過を熟知している中堅の教員
◎　実際の授業と同じ、45 分間で
◎　場所は、教室とよく似た環境が望ましい

5 分間の事前研究

◎　授業者の説明
　◇　なぜこの教材で模擬授業を行うのか
　◇　これまでの研究で大切にしてきた点
　～模擬授業のねらいについてのみ説明する～

児童と同じ立場で授業を受けるため、本時のねらいや授業展開などは詳しく説明しません。学習指導案も初めは配付しません。

45 分間の模擬授業

◎　導入から終末まで実際の授業と同じ流れ（同じ時間配分）で行う。
◎　指導者は、発問や指示、教材提示等、児童に対応する時と同じように行う。
◎　児童役は、指導者のはたらきかけ（発問や指示、教材提示等）だけをもとに、反応（挙手、回答、作業、思考）する。

・教材提示の方法や順序
・発問の内容
・板書の位置や整理の仕方等、
授業に必要な技術を学ぶことができます。

児童の立場から考えた授業展開について協議ができるので、経験年数が違っても発言がしやすくなり、事後研究会の雰囲気が変わります。

30 分間の事後研究

＜協議の柱＞
①　児童の立場から考えた授業展開について
②　資料や教材の提示の仕方、発問の内容等授業技術について

模擬授業が終わってから、学習指導案を配付し、改めて授業の展開を確認します。

教員の声

◆　年度当初に、模擬授業を通して、研究の方向性について共通理解を図ることで、特に経験年数の浅い教員や新しく赴任してきた教員にとって、これまでの研究の経過や目指す授業がイメージしやすくなり、見通しをもって研究を進めることができました。
◆　模擬授業を行うことで、全員が授業内容を十分把握することができ、研究授業の事後研究会では、出された意見をより焦点化することができました。
◆　校内研究で大切なのは、全員で授業をつくり上げていくという意識と過程です。模擬授業に参加することで授業づくりに対する意欲の高まりが大いに見られました。

実践のポイント
　児童役を演じることを通して、今まで見過ごしてきたことに気付きます。これらの授業の展開や発問等についての気付きと改善点を中心に研究協議します。授業者や発言者の意見に耳を傾け、その意図を汲み取りながら、よりよい授業にするために具体的な意見を交流することが大切です。

Q7を受けて 実践例

授業研究を深めるために
― 教科指導を行っている全教師が授業を公開する授業研究会の持ち方 ―

事後研究会での協議が深まりません。何かよい方法は？

討議の柱の設定

授業研究の総括をもとに、年度のスタート時に研究部で、「自校の生徒実態」を考慮し、実態に即したテーマを設定します。その**テーマにそった討議の柱**を事前に設定し、授業研究会の２週間前には研究部より提示し、全教職員で共通理解を図ります。

授業参観シートの作成

授業参観当日には、どのような部分を意識して参観すればよいのかを明確にすることや、授業について思ったことなどをしっかりとメモをとりながら参観することが、事後研究会の活性化につながります。そこで、研究テーマや事後研究会での討議の柱を意識し、授業観察の観点を明確にできるような各校独自の**「授業参観シート」**を作成しておきます。

主張や提案のある指導案の作成

授業者は研究テーマや事後研究会の討議の柱に即した自分の授業の見所を**「授業のポイント」**として、また意図を明確にした**「簡単な流れ」**のわかる指導案を作成し、前日までに全教員に配付します。参観する教員は当日までに指導案に目を通し、参観に臨みます。

Check!

事後研究会の持ち方の工夫

より活発に意見を出し合う事後研究会にするために、５人程度の**小グループ**に分かれ、研究協議を行います。各グループの司会者は討議の柱にそって話し合いを進め、まとめを研究部に提出します。研究部はその日のうちに各グループからのまとめをもとに成果と課題を明確にし、翌日の全体研究会でまとめや今後の授業研究会の方向性を示すことができるように準備をします。

事後研究会の分散会でのグループ分けのポイント

- **教科の壁を越え**、いろいろな視点から学び合えるようにするために、実技教科や同じ教科はできるかぎり別のグループに編成する。
- 世代（年齢）の壁を越え、互いが学び合えるようにするために、各グループは**ベテラン、中堅、若手などのバランス**を考えて編成する。

Check!

研究会の記録と整理

毎回の授業研究会の記録をファイルし、**「いつでも」**、**「誰でも」**活用できるように残していきます。また、研究部から成果と課題を明確にした**「研究だより」**を発行することで全教員の共通理解を図り、授業に対する意識を高めて研究に継続性をもたせることができるようにします。

UP

こんな進め方をしました

教科指導を行う全教師の授業を公開する授業研究会のもち方

全教師を複数のグループに分ける

学校の実態を踏まえ、次のようなことを配慮し、グループの編成を行う。
・実技教科や同じ教科の教師は同じグループにしない。
・経験の浅い教師とベテランの教師が一緒になるように編成を工夫する。

グループごとの公開授業の時間を設定する

各グループの公開授業の時間を設定し、設定された時間は授業者以外の同じグループの教師が参観できるように特別時間割を組む。

指導案（授業のポイント）を提示する

授業者は研究テーマや討議の柱を考慮し、今回の授業のポイントとして**「ここを見てほしい」**という自分の授業の見所を提示し、大まかな授業の流れの分かる簡単な指導案を全教職員に公開授業の前日までに配付する。

公　開　授　業

参観者は「授業のポイント（指導案）」と**「授業参観シート」**を持参し、事後研究会の討議の柱を意識しメモを取りながら授業を参観する。

事 後 研 究 会

全体会（当日）

事後研究会の流れや分散会での討議の柱等の確認を研究主任が行う。

各グループでの分散会（当日）

授業参観をした各グループに分かれ、研究協議を行う。司会者は討議の柱をポイントとした協議になるよう意識して話し合いを進める。記録担当者は出された意見を翌日の発表に備えてわかりやすくまとめておく。

各グループで行われた協議のまとめを分散会後研究部に提出する。その日のうちに研究部で成果と課題を整理してまとめを行い、翌日の全体会で今後の授業研究の方向性を示せるよう事前に話し合いをもつ。

全体会（翌日）

前日の分散会の報告を各グループから、次に全体のまとめを研究部が行い、今後の授業研究の方向性を示す。

研究会の記録と整理

研究部で報告やまとめなどを中心に記録し、ファイルする。また、**「研究だより」**を発行し、成果と課題を全教職員で共通理解する。

Q8を受けて 実践例

付箋を使い、授業研究の活性化をねらう
― 授業評価票とＫＪ法を組み合わせる ―

研究授業を見る時、こんなことはありませんか？

授業評価票
「チェックする項目が多い・・」
「とりあえずどちらでもないにつけておく・・」

ＫＪ法での参観
「授業を見ながらでは、付箋の整理ができない。」
「評価票と付箋を両方書くことはとても煩雑である・・」

「評価票の整理」と「ＫＪ法の付箋つき評価票」

・「印象に残った点」だけを記入してもらうことで、チェック項目の精選となった。
また、とりあえずつけることもなくなった。

・チェックリストに、ＫＪ法の付箋項目を付ける。
評価票記入と付箋での成果・課題記入を一枚の用紙に書き込むことができる。

○○ 小学校　体育科授業　参観チェックリスト

このチェックリストは、授業者の授業改善に役立てる資料とするだけでなく、事後研究会での協議の切り口（書いてあるものをもとにして、誰もが気軽に話せるきっかけに）とするものです。参観した授業について、お感じになったままにチェックをし、授業後から事後研究会までの間にご記入ください。事後研究会では、チェックされた際の理由などを中心に交流します。理由が話せるようにしておいていただければ幸いです。

（　　）年（　　）組の授業を参観して・・・

	印象に残った点		あてはまらない	あまりあてはまらない	よくあてはまる	たいへんよくあてはまる
1	○	パワーアップタイムでは、主運動につながる内容であった。	○	○	○	○
2	○	指導者は、積極的に褒めたり、励ましていた。	○	○	○	○
3	○	指導者は、適切な指導助言を積極的に行っていた。	○	○	○	○
4	○	学習成果を生み出すような教材・教具や場の工夫ができていた。	○	○	○	○
5	○	グループチャレンジでは、思考をかき立てる発問ができていた。	○	○	○	○
6	○	グループチャレンジでは、児童同士の励ましや歓声などが見られた。	○	○	○	○
7	○	グループチャレンジでは、児童同士が積極的に教え合っていた。	○	○	○	○
8	○	児童は、自ら進んで学習していた。	○	○	○	○
9	○	運動量を確保し、授業の場面展開がスムーズに行われていた。	○	○	○	○
10	○	児童の上達していく姿が見られた。	○	○	○	○
11	○	児童が何を身につけようとしているのかがよくわかる授業であった。	○	○	○	○

＊　○印にチェックを入れてください。
＊＊　すべての項目にチェックを入れる必要はありません。

授業全体を見て・・・

参考になった点	質問したいこと	改善した方がよい点

・チェック項目を４点にして、「どちらともあてはまらない」を無くした。これで成果と課題がはっきりする。

・普通に感想の欄を作るより、「参考になった点」「質問したいこと」「改善した方がよい点」と分けると意見がでやすい。
・「質問したいこと」から話し合いを始めるとスムーズに行く。

実践者の声
「評価票」や「ＫＪ法」の良さを同時に入れては？とのアドバイスを受けて、このチェックリストを作成しました。

ヒントボックス
研究発表会にも参加者にチェックリストを記入してもらい、事後研究会では、これを基に意見を交流します。同学年でない先生が共通の話題で話し合うことができます。

Q9を受けて 実践例

授業研究を深めるための実践例
― 授業研究のための共通理解 ―

研究テーマについての共通理解を図る

研究テーマ

共通理解

ブレーンストーミング

目指す子どもたちの姿を具体的にどのような活動や行動として見ることができるのか、テーマについてできるだけ多く書き出す。

Ｋ　Ｊ　法

グループで話し合いながら、学年に適した活動、行動に分類・整理する。

全体での協議

グループで分類・整理した内容を出し合い、全体で学年に適した活動、行動に分類・整理する。

たとえば

研究テーマに沿った学びの系統表

研究テーマ	具体的な行動・活動	学びを支える基盤（スキル）
低学年	・○○している。 ・○○できる。	・最後まで聞く。 ・「です。ます。」まで言う。
中学年	・△△する。 ・△△になる。	・……。 ・……。
高学年	・□□。	

学びの系統表の活用

授業を見る視点として

事後研究会の協議の柱として

日々の授業の振り返りにも

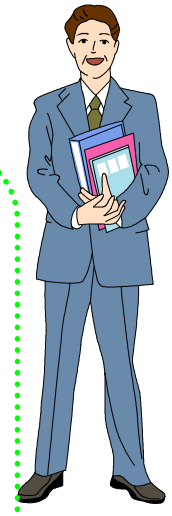
UP

実践のポイント

ブレーンストーミングは、「質より量」です。できるだけたくさんのアイデアを出します。他の人のアイデアを否定してはいけません。ＫＪ法では、分類したかたまりごとの関係を考えることが大切になります。しかし、共通理解を図るためには、何よりもまず話し合うことが大切です。一つのことを明らかにするために話し合う過程が、共通理解へとつながります。

Q11を受けて 実践例

教員の意識を高める取組
― すべての教員が積極的に参加できる工夫 ―



目標設定について（参考例）

授業実践における教員一人一人の具体的な課題意識は、地域・保護者の願いや生徒の実態を把握することから生まれてきます。ただ、各教員のスキルや対象となる生徒の状況の違いから、教員それぞれによって、異なるものであって当然と考えるべきでしょう。教員全員が意欲的に授業実践に取り組むには、まず各教員が目標を設定することを最優先に考えます。一つの方法としては、**「全教員共通理解のもとの研究主題」**と**「各個人の課題意識からなる授業実践目標」**をそれぞれ年度当初や各学期当初に設定し、定期的にその評価を行っていくのが有効です。

全教員共通理解のもとの研究主題

① 「地域の願い」や「生徒の実態」について（できれば前年度中に）共通理解をする。
② 年度当初に掲げた学校教育目標や重点課題を踏まえて、全教員共通の（場合によっては教科ごとに）授業における研究主題を設定する。
③ ②で設定した研究主題を追究するために、学期ごとの目標を設定する。
④ ③で設定した目標については、公開授業等で定期的に評価を行う。

各個人の課題意識からなる授業実践目標

① 各学年、授業ごとに対象となる生徒の実態把握を行う。
② 各個人の授業に対する課題意識に基づいて、各学期当初に授業実践目標を設定する。
③ ②で設定した授業実践目標を達成するために、日々の授業で心掛けることを設定する。
④ ③で設定したことについては、個人ごとに、月ごとなどできるだけ短いスパンで評価する。

授業実践目標の設定と見直し

教員は自らの授業実践目標を明確に設定することが大切です。年度当初に設定する授業実践目標を年間指導計画や評価計画とは別に明文化し、具体的に授業の中で実践することです。また、実践してみて自己評価や他者評価を積極的に取り込み、**授業実践目標を定期的に見直すこと**が必要です。その上で、学校としての授業研究に臨むことができれば、全体として高い意識を生み出すことができます。

各教員が年間を通した**授業実践目標の設定**を行う。 → 定期的に自己評価や他者評価を加え**見直す**。 → **新たな課題を設定**し実践を重ね総括を行う。

授業実践におけるグループ設定について

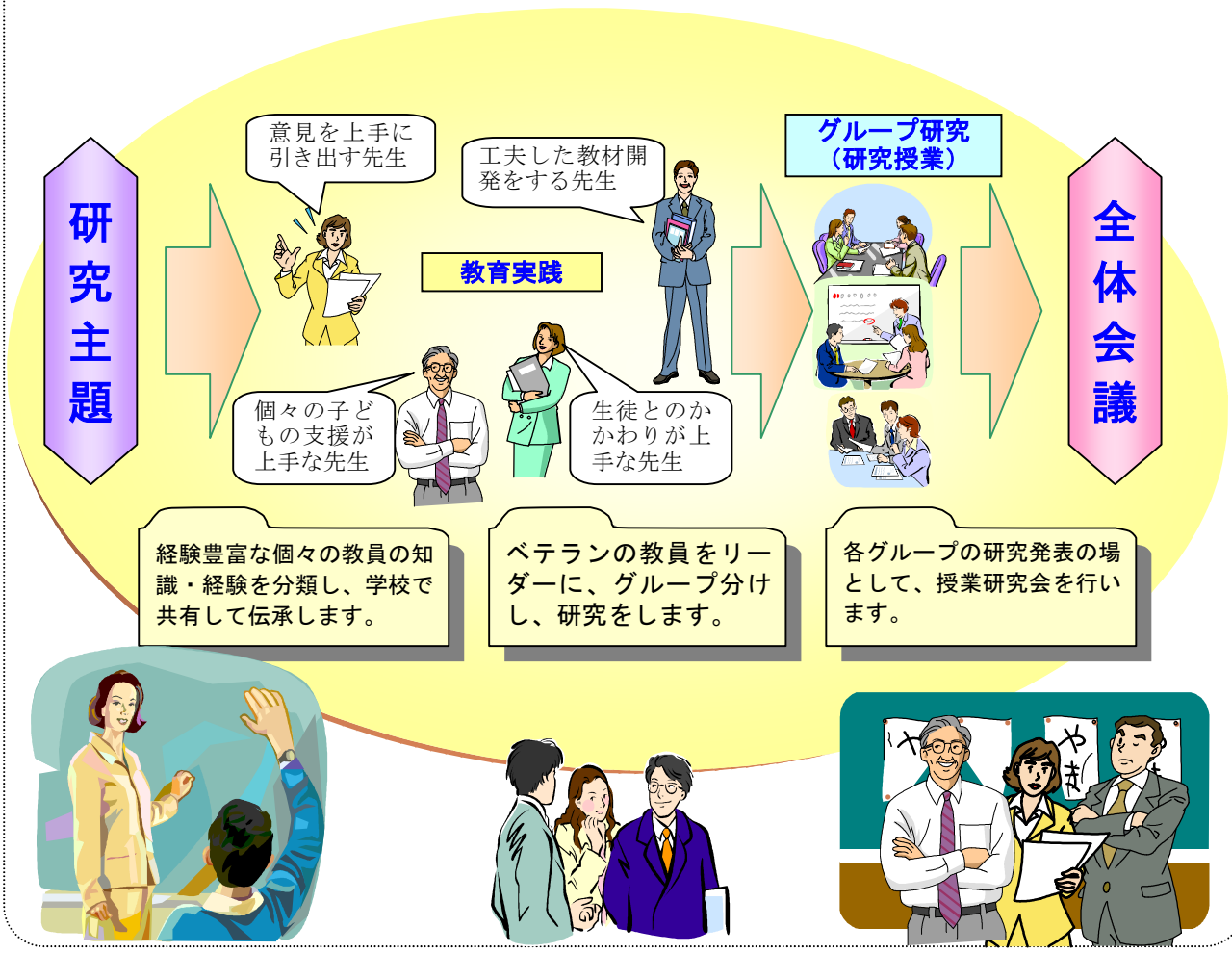
1

研究組織を同じような個人目標を挙げた教員で小グループに分けて、各グループで研究授業や事後研究を行うとともに、小グループで独自のサブテーマや研究仮説を設定することや、各グループが**「研究成果の調査」**や**「先行研究の調査」**などの役割を担当することで、全教員が積極的に研究にかかわることができます。

2

各学校の経験を重ねたベテラン教員をリーダーとして小グループに分けます。個々の教員の知識・経験を他の教員も共有でき、学校の財産として生かせるだけでなく、全体のレベルアップとしても活用できます。

ベテラン教員の実践を共有して伝承する



3

授業実践を効果的に進めていくためには、時として教科の相違が障壁となることがあります。また、時間的制約によって、小グループ内で研究、検討を行ってから全体で協議することが有効である場合もあります。まず、研究組織を教科ごとのグループに分けるのも一つの方法でしょう。主体的に授業実践にかかわることができるように、下記のような方法をとりました。

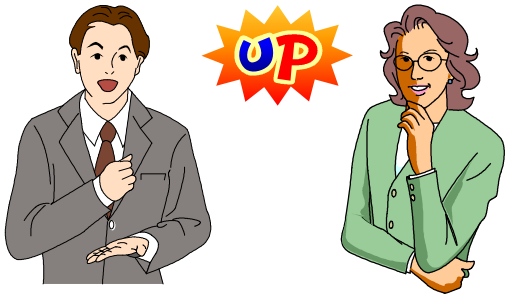
① **教科ごとに**教科主任とは別に**研究主任を**設け、その教員が中心となって各個人の研究主題の把握や公開授業の計画を行う。
② **定期的に**教科グループ内で互いに**公開授業**を行う。
③ 評価については、まず**教科グループ内で総括**してから全体で協議する。

小グループをさらに生かす工夫

小グループに分けることで、全教員が積極的に研究主題にかかわるばかりでなく、個人目標を追究する機会が増えました。しかし一方で、小グループの方向性がバラバラになったり、研究に行き詰まるグループが出てきました。そこで、定期的な全教員参加型の授業研究会で、研究主題を再確認しました。

さらに、小グループを生かしていくために、全教員参加の授業研究会を各グループからの発表の場、交流の場としました。互いの研究内容から刺激を受け、多くを学ぶことができます。全教員が共に学び合い成長し合っていると感じることができる授業研究会になりました。

また、研究会の協議が一部の教員の発言で進行するのではなく、全員が発言、参加できる協議方法を取り入れました。



Q12を受けて 実践例

授業研究のための共通理解

― 共通理解の方法 ―

「授業研究の目的」についての共通理解を図る

○授業研究の目的や課題を絞り、共通理解することで視点が明確になります。

《基本的な手順》

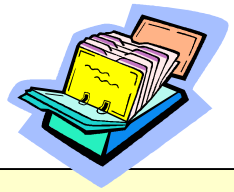
①　理論研究
外部講師や文献から研究領域についての概論を研究し、研究の目的や内容について共通理解を図る。（同じ土俵に立つ）

②　事前グループ研究会１
授業の素案をもとに、少人数で授業のねらいや迫り方について検討する。
（授業者の支援グループ）

③　事前グループ研究会２
授業のねらいを明確にし、学習指導案を完成するとともに、参観の視点を決める。
（授業の質を上げるため、組織的な検討）

④　事前研究会
全教職員に学習指導案及び参観の視点を提示し検討を加える。
（授業のねらいや視点を確認）

⑤　事後研究会
ビデオや授業記録をもとに参観の視点についてフリーカード法などを使って授業を検討する。
（プラス面、マイナス面の整理）



⑥　記録の整理
記録を整理し、指導案・授業記録・事後研記録を一つの袋に入れて整理する。
（実践記録の蓄積）

このように組織的な授業研究会は、頻繁に行うことはできません。しかし、授業者が自ら作成した学習指導案の長所や短所を、第三者とともに検討し直すことによって、発想が広がり、授業の組み立ても練られたものになりました。②～④については会議が持てないこともありますが、基本的な手順（①～⑤）を共通認識しておくことが大事です。Ｑ１５の事例のように気軽にできる授業公開と組み合わせていくのもよいでしょう。

実践のポイント
授業研究の質を上げるためには、組織的な研究が必要になります。組織的に練り上げることで授業者の指導観が深まり、授業力が向上します。

ヒントボックス
この方法は、「よい授業」だけでなく、参観の視点を考えたり、授業研究の方向性を見直したりするときにも活用できます。

Q13を受けて 実践例

全員そろって授業研究を行う例
－ビデオを使っての授業研究－

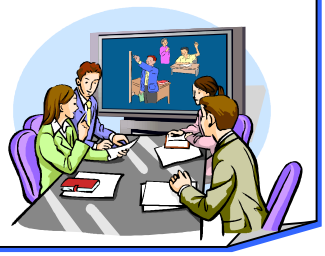
時間を有効的に使う

授業時間内の授業研究が困難な場合、ビデオを使っての研究が効果的です。授業の様子を固定カメラで撮影しておき、放課後などに全員で視聴します。この方法であれば、全員が無理なく授業研究に参加できます。学級全体あるいは児童・生徒の動きがわかりづらいなどの問題点もありますが、教師の発問や支援といった気になる点は繰り返し見ることができるといった利点もあります。

意見を出しやすい方法を工夫する

ビデオを使っての授業研究の場合、リアルタイムの授業と異なり、「緊張感に欠ける」「ただ何となく見てしまう」などのおそれがあります。通常の授業研究以上に、どんな点を見るのか、何をねらいにした授業研究を行うのか、視点を明確に提示しました。また、グループ分けをしてビデオ視聴の際の役割を明確に示しました。

①グループごとに視聴のポイントを振り分ける。
　Ａ：教師の動きを見るグループ、児童・生徒の動きを見るグループ
　Ｂ：よい点を見るグループ、改善点を考えるグループ
②指導案からねらいを省いておき、ビデオを見て考える。
③ビデオを見ながら指導案を作る。



全員がそろわない・・
時間がない・・・

解決するため

参加できる時間帯に設定する。
短時間でも有意義なものにする。

全員が参加できる研修会にする

ブレーンストーミング・ＫＪ法

具体的流れとして

事前のグループ分け

約１時間の流れ

①　授業者より　授業のポイントなどを指導案を使って説明
②　ビデオ視聴（２５分間）
　　ビデオを見ながら気付いた点を付箋に書き出す。
③　グループごとに討論・分類
④　ポスターセッション
　　できあがった模造紙を使い、討論の様子や分類の方法、気付いた点を説明する。
⑤　授業者より　発表を聞いて感想を発表する
⑥　講評　　【準備物】授業ビデオ・学習指導案・付箋・模造紙・マジック

気付いた点は付箋にたくさん書き出します。その後、グループごとに話し合いながら、気付いた点を模造紙の上に分類し、まとまりごとにタイトルをつけます。互いの気付いた点、授業のポイントとなる点などについて気軽に交流し合うことを目指しています。

実践のポイント

必要なところを編集できるのがビデオの良い点です。すべて見る・導入をみる・本時の目標に関わる指導の部分を見るなど、研究のねらいを明確にして活用しましょう。

教員の声

◆　ビデオを見てというのはいい考えでした。後の交流もひと工夫あって良かったと思います。（参観者）
◆　多くの先生方の御意見が集まることは普段ではなかなかないので大変有益でした。今後の授業の参考にしたいと思います。(授業者)

Q14を受けて 実践例

年度当初　第１回校内研究会までに！

― 授業研究への疑問・不安解消をめざして ―

新年度になり、あなたは校長から**研究主任（研究部の一員）として任命**されました。
昨年度までの引継ぎ資料はあるものの・・・どう推進していけばいいか不安でいっぱいです。
１週間後、第１回校内研究会が控えています。まず校内の教職員に対してどんな内容の校内研究会を開きますか？　あなたのプランを書きましょう。

Pointは

誰のための何のための研究かを明確にすること!!

納得いくまで事前に周りに相談すること！

Step1　とにかく振り返る

①　授業研究における総括資料をもう一度取り出して、特に課題部分（**研究主題　研究推進面　公開授業**の部分）をじっくり読みましょう。
②　昨年度までの資料から自校の研究推進の流れをつかむことが大切です。
③　この振り返り作業は１人ではなく新研究部で取り組みましょう。

すると

◎　校内研究会での「今年度研究を進めるに当たって大切にすること」などの資料を作ることができます。
◎　転勤したばかりの教員でも容易に理解できるような説明資料になります。
（自分が転勤したばかりならば自らの研修になるものにしましょう。）
◎　次第に研究推進役としての自覚が高まり、率先して研究に取り組むことができるようになります。

Ａ小学校の資料

平成19年度重点研究を進めるにあたって

重点研究部　H19．４．４

１　確認事項
(1) 研究主題について
→決定の経過は別紙資料平成１８年度学校評価会議（Ａ部会）参照

(2) 学級経営（児童理解）を基盤にした学習指導・生徒指導を実践の出発点とする。
→年度当初、校長から出される「学校教育目標（めざす児童像）」に基づき、学年目標を決め、さらに学級目標を決める際には、以下の点を意識する。
・「学校教育目標（めざす児童像）」に基づいた目標
・児童の実態に即した「確かなコミュニケーション能力の育成」に関する目標
（キーワードは伝え合い、認め合い、学び合い・・・・・）

(3) 全教育活動において「確かなコミュニケーション能力の育成」を意識した実践を進め児童の変容をつかむ。
→公開授業事前研究会では、「確かなコミュニケーション能力の育成」を意識した実践になっているかどうか、人権教育、情報教育の視点が明確になっているかどうかを確認する。
→各班公開授業事後研究会では、必ずお互いを認め、励ましあう人間関係づくりができる。
児童に育ったかどうか検証を行う。見る視点を明確にし、児童の変容をとらえる。

(4) 学力向上のための全校的取組
→国語部、図書館教育部、特別活動部と連携をとりながら進めていく。

(5) 教職員として研究推進のための姿勢（以下の点について教職員が意識する）
→全教職員が理解してこそ研究推進の意味がある。そのために研究内容について分かりにくいことは分からないと伝え
る。理解している教職員が伝えていく。
→特にＩＣＴ操作面については職員室を毎日の研修の場として、お互いに気軽に聞き合い、学び合う雰囲気を大切

Step2 研究主題を明確に

① 特に研究指定校でない場合、各教科や様々な領域（情報、環境など）の中からどの内容にしようか悩むところだと思います。全体会では、児童生徒の実態を十分に分析検討して作成された学校教育目標の具現化に向けて、課題の明確化を図り、共通理解をしましょう。

② 研究主題が決まっている場合は設定理由をきちんと説明しましょう。（Step１作成資料と関連します。）

つまり

◎ **「児童生徒の課題解決のために」**は「何を研究すべきか」を念頭に研究主題設定をします。

◎ 児童生徒の課題を解決するために**「やらなければいけないこと」**を各教科・領域から見いだすことです。

◎ ＫＪ法等の手法を用いて児童の課題と思われる部分を出し合い、そこから「やらなければならないこと」をキーワード的に研究部で整理し、研究主題へとつないでいきます。キーワードの例は**「学力向上」（読む・書く・伝え合うなど）「共に学びあう」「学習習慣確立」など**。

Ａ小学校の場合

児童の実態（課題）について
- 一言で返事する等、単語で話し、語尾があいまい。
- 心情を話すこと、考えて話すことを苦手としている。
- 相手に対して一方的、攻撃的な話し方が多い。
- その場、相手に応じた言葉遣いができない。
- 相手の目を見て話せない児童が多い。
- 自分とは違う意見を聞き入れない。
- 話をしている途中に入り込むことがある。

→ 確かな コミュニケーション 能力の育成

Step3 自信を持って臨むために

さあ、進めるための準備は整いました。あとは今後の見通しをもち、計画を立てましょう。

そして

◎ 今後の見通しの大まかな内容は
- 研究主題も含めた研究部方針提案
- 公開授業計画（各学期）
- 事前研究会　事後研究会
- 外部講師への依頼
- 外部への公開研究会に向けて
- 年度末総括　研究紀要作成
- 研究を進めていく上で大切にすること

Ａ小学校の場合

平成 19 年度重点研究の見通し

	全体会 各班会 校内研	校内研究会・公開授業等	人権教育推進班	情報教育推進班
４月	４日	前年度までの重点研究経過説明	活動方針案作成	活動方針案作成 校内PC操作説明
	13日			
	18日	平成１９年度重点研究部方針提案 及び人権・情報班方針提案	人権教育・情報教育報告	
	25日	学習指導案形式確定 （各教科　道徳　特別活動） →班長会から提案		ＨＰ作成・更新 研修
５月	９日 までに	見本公開研究授業事前研 （全体会）（人権教育　情報教育）	人権に関する アンケート	
	21日 23日 または 31日	研究授業及び事後研 外部講師による講義 （人権教育　特に情報教育） ＨＰ作成Ⅰ・Ⅱ（各学年・各分掌）		演劇鑑賞会
６月	日	指導主事訪問（全教職員）		ＨＰ更新
	６日			
	27日	研究授業事前研（全体会） （人権教育６年社会科） ＨＰ作成Ⅰ・Ⅱ（各学年）		
７月	2～4日 の間に	研究授業６年社会科（６年）	人権ﾎﾟｽﾀｰ標語	１学期実践報告 実技研修会 ＨＰ更新 年間指導計画修正 情報モラル学習会
	４日	研究授業事後研（全体会） （人権教育６年社会科）		⇩
	26日 27日	研究発表指導案検討（素案） （全体会） →授業テーマを絞っておく。 （ＩＣＴ利活用、情報モラル等） 低（　　Ｔ） 中（　　Ｔ） 高（　　Ｔ） ＨＰ作成Ⅰ・Ⅱ（各学年）	同和教育学習会	

Q14を受けて 実践例

授業研究をスタートさせるために(1)
― 授業研究会のルールと実施方法 ―

授業研究の実施方法(中学校例)

４月

授業参観週間の設定

年度当初は、授業を参観しやすくするためにも、“**誰もが自由に授業を参観**してよい”期間を設けてみましょう。特に準備は必要ありません。まずは、気軽に授業を参観できる雰囲気をつくっていきましょう。

５月

参観グループの決定

授業研究に向けて、授業を参観し合う教員のグループを作ってみましょう。なかなか全員の授業を参観し合うことは難しいものです。そのために、教員を**教科・経験年数等を考慮**して、**４～５人**ずつのグループに分け、そのグループ内で研究授業・事後研究を行います。

学期ごとに１回

研究授業実施週間の設定

学期に１回ずつ、**参観グループ**内の教員で研究授業を実施します。すべての教員が、３回の研究授業のうち最低１回は授業を公開します。そのために**時間割の調整**が必要になりますが、少人数のグループのため、容易に調整できます。事後研究では、まずグループ内で、研究授業のテーマに沿って、参観した授業を中心に話し合います。**少人数での話し合い**なので、率直な意見交流ができます。また、毎回話し合うメンバーが同じであると、どんな意見でも出しやすい雰囲気がつくられます。そして、全体会で**グループごとに交流**(口頭や紙面)し、協議をすることでさらに研究の視点を明確にしていきます。

Q14を受けて 実践例

授業研究をスタートさせるために(2)

特別支援学校(聴覚障害)における授業研究会

Point

授業研究を魅力あるものにするためには、児童生徒の学習における実態からスタートし、授業研究の経験が不足しないようにすることです。

魅力ある授業研究には、次のような要件が望まれます。

① 児童生徒の障害の状態や特性とともに学習課題を明らかにし、研究のテーマを焦点化します。

② 研究の成果として、児童生徒の変容が見えるものにします。

③ 教科指導における専門性が高まるように設定します。

児童の実態や学習課題を踏まえた研究テーマの焦点化

授業研究は、教員にとって必要であるだけではなく、児童生徒に「わかる喜び」、「できる喜び」を味わわせることのできる授業を創造するという楽しくやりがいのあるものです。授業研究が魅力あるものになっている場合は、児童生徒の学習の実態を踏まえた具体的な内容になっていると考えられます。

まず、児童生徒の障害の状態や特性とともに学習課題を客観的に把握することがスタートです。次に、障害の状態や特性が多様であっても、何をテーマに研究していくか焦点化することです。

児童生徒の成長を確認しながら進める過程に教員としての喜びがあります。授業研究を魅力あるものとして継続していくために、児童生徒の成長が見えることは重要なことです。

児童生徒の変容が見える研修

テーマに沿った授業研究を企画し、一人一人の児童生徒の学習課題を整理します。その課題を解決するため、授業を通して、

①「何を教えるか」

②「何を考えさせるか」

③「どんな活動を設定するか」　　などを事前研究会で共通理解します。そして、研究授業を行い、①②③を関連づけながら一人一人の児童生徒がどのように変容したかを事後研究会で検討します。

児童生徒が成長していることを実感できるようになると、教員も成長します。

特別支援学校における留意点

特別支援学校では、障害に関する研修は多く行われていても、授業研究が少ないことがあるかもしれません。そのため、専門性を「障害についての知識がある」「手話ができる」など、狭くとらえている教員もいます。

特別支援学校における授業研究では、一人一人の児童生徒の障害の状態や特性を踏まえながら、どのように学習意欲をもたせるか、学習内容を理解させるための教材や手立てをどうすればよいのか、めあてに迫るための授業展開をどうするかなどを研修内容とすることが必要であり、それが指導の専門性の向上にもつながります。

A特別支援学校(聴覚障害)における「授業研究会のルール」例

授業研究のポイント

① 学習意欲を高めるためにどうするか。

② 学習内容を理解させるためにどうするか。

③ めあてに迫るためにどうするか。

・児童の実態（障害の状態や特性・学習課題）を踏まえる

・研究テーマを決める

授業をみるポイント

① 「教えるべきこと」は教えられたか。

② 「考えさせること」は考えさせられたか。

③ どんな活動場面が、設定されていたか。

◎ 年間一人最低１回は授業を公開する。
（児童生徒の負担にならないように計画する）

◎ 障害の状態や特性を踏まえながら、一人一人の学習課題を整理する。

◎ 授業のめあてである「身に付けたい力」を明確にする。

◎ 学習指導案は略案でもよい。（活性化すれば、学習指導案を充実していく）

◎ 事後研究会では、子どもの変容を具体的に交流する。

指導の専門性の高まりにより、授業に自信が持てる。

Q14を受けて 実践例

授業研究をスタートさせるために(3)
― 全員が一丸となる授業研究 ―

協働性を高める授業研究

これまでの体育実技に関する研究の状況
- 今までは、表現力については研究を続けてきた。
- 体育科学習における実技については、専門的に研究してきた経験が少ない。

まずは、教師が運動の楽しさ、体育のおもしろさをみんなに気付かせることが大切！

Point①
《授業研究の前》
・校内研修で全員参加の体育実技研修の時間

次に、体育授業の成果と課題をみんなで探すことが大切！

Point②
《授業研究》
・全員参観

Point③
《授業研究後》
・参加型のＫＪ法を用いて、授業の成果と課題を全員で考えた。

「みんなで体を動かす」「みんなで考える」
共に体験したり、学習したことで研究授業に一丸となって取り組む雰囲気が生まれた。

教員の声

◆　実技研修は、笑顔が多く、楽しく取り組むことができました。まずは、教科の特性を楽しむことから始めたことがよかったです。
◆　実技研修などは、共通体験をすることで、共に学び合う雰囲気が生まれてきます。

Q14を受けて 実践例

授業研究会のルール

― みんなで深め合う研究会のルールとは ―

研究授業を見る時、こんなことはありませんか？

目的

・授業を参観し合い、学力充実推進のための授業改善の視点で、教員の授業力向上を目指す。
・初任者研修との融合で、有効かつ広がりのある校内研修を進める。

実態

・代行体制が整わない。（特に低学年）
・事前研究会・事後研究会のための時間確保が難しい。
・**小・中学校における学習の接続**を考えて小・中学校合同で授業研究会を進める場合、どのような点に焦点を絞るのかが難しい。

小・中学校で同一の研究主題を設定

・研究主題を意識した内容とし、**コミュニケーション能力の育成**をテーマとした授業改善の視点を必ず入れる。
・全員が公開授業あるいは実技研究を行う。授業の代行や時間割を調整して空き時間を作り、参観する。授業公開後、参加者で事後研究会を行う。
・授業公開については、学習指導案（略案）を準備する。
・事後研究会での成果と課題を全教職員で再度共通理解し、日々の授業改善につなぐ。→紙面で報告

◇指導案例（５年生・総合的な学習の時間）

総合的な学習の時間学習指導案

指導者　○○○○（Ｔ１）
指導者　●●●●（Ｔ２）

１　対　象　　第５学年２組　　男子　　名　女子　　名　計　　名
２　日　時　　平成○年○月○日（○曜日）　第　　校時
３　場　所　　第５学年２組　教室
４　単元名　　「ブックトークをしよう」（総合な学習の時間）
　　「人間の生き方をえがいた作品を読もう」（国語科）
５　本時の目標（本時　　５／１０）
・グループの中でブックトークをし、友だちのよいところを見付けることができる。　（話す・聞く能力）
・よいブックトークとはどのようなものか考え、自分たちのやりたいブックトークの手法を見付けることができる。（関心・意欲・態度）
６　授業改善の視点
・ブックトークを通して、友だちとのコミュニュケーション能力を身に付ける。
・伝記に描かれる人物の魅力に触れ、伝記というジャンルへの苦手意識をなくす。
７　本時の展開

過程	主な学習活動	指導形態	指導上の留意点		評価（観点）	資料
			Ｔ1	Ｔ２		
導入	本時のめあてを知る。	一斉	班でのブックトークで気をつけることを考えさせる。	ブックトークとは何か解説する。		
展開１	グループ内でブックトークをする。	グループ	班の友だちのよいところを見付けさせるようにする。	班の友だちに分かりやすくブックトークできているか、机間指導する。	みんなに聞こえる声で伝えたいことをはっきり話す。（話す能力） 友だちの良さを見付けながら聞く。（聞く能力）	手作りブックカバー
展開２	浦野先生のブックトークを聞き、ブックトークの手法を学ぶ。 自分たちが紹介したい本を決め、ブックトークの方法を考える。	一斉 グループ	相手にアピールする手法について考えさせるようにする。 相手にアピールできる手法が取り入れられるようアドバイスする。	いろいろな手法を用いてブックトークをする。 相手にアピールできる手法が取り入れられるようアドバイスする。	興味を持って聞く。（関･意･態） ブックトークの手法を考えられたか。（関･意･態）	ブックトークの資料
まとめ	次時予告	一斉	次回は発表する準備をすることを伝える。			

「授業改善の視点」に**研究主題（コミュニュケーション能力の育成）にかかわる改善の視点**を必ず記入します。

◇公開授業（２年生・算数）

参観のポイントを明確に！
・発言のルール
・声の大きさ
・児童同士の伝え合い

研究主題（コミュニケーション能力の育成）に関わる参観のポイントの視点

参観者は授業改善の視点に沿って、評価をします。
発言や話し合いなど、児童のコミュニケーションの様子について特に観察します。

授業改善の視点の中心であるコミュニケーション活動がどうであったか、必ず事後研究会で話し合います。

◇授業を受けて事後研究会

授業改善の視点に沿って、評価し、授業の成果と課題について事後研で話し合います。授業に参加した者は全員が参加し、また参加しなかった教職員に伝わるよう、成果と課題をまとめた「公開授業報告書」を学力充実部から出します。

参観のポイントをもとに
必ず共通理解を！

小　学力充実推進部

第３回　公開授業　事後研　報告

Ｈ１９年９月　　日（　）　１年　組　　学級「国語」
授業者　　教諭

単元名　　おはなしだいすき「サラダでげんき」

本時のねらい　ゲームを通して話のだいたいをつかむ。

授業改善の視点
・子どもが生き生きと学び合うために、アニマシオンを活用して楽しい授業作りをする。

①授業者より
・理解力の弱い子どもでもゲームなどには参加できるアニマシオンは、低学年に効果的だと思う。
・学習に入ってすぐの教材であり、「物語バラバラ事件ゲーム」の文は短めのものを選んだ。
・本時のまとめで読むときに、一人読みは初めてなのでとまどっている様子だった。

②参観者より
＜アニマシオンについて＞
・ゲームを取り入れた楽しい授業であった。
・読解教材としての物語文では、アニマシオンを取り入れるのは効果的であり、導入時に子どもの興味を惹きつけることができればその後の授業が進みやすい。子どもが国語が楽しみになるのではないか。
・「ダウトを探せ」では、多くの児童が集中して取り組めていて感心した。
・「ダウトを探せ」では、言葉にこだわることになっている。
・中学年でもアニマシオンを取り入れるのは効果的ではないか。
・「物語バラバラ事件ゲーム」では、絵と文章を結ぶという取り組みやすい課題であり、文章カードに対して「難しそう。だけど、やってみよう。」という意欲が見られた。

＜コミュニケーション活動について＞
・話し合い活動に入るとき、何を話し合うかはっきりしており、内容も魅力的でわかりやすかった。（物語バラバラ事件ゲーム）
・班討議の人数が４人ぐらいまでなのでスムーズに話し合えていた。

成果
・相互に授業を交流することで、今後の授業の糧となった。
・１つの教科でなく、コミュニケーション活動に「授業改善の視点」を置いたことで児童の実態が見え、学年の系統性の見直しにつながり、以後の指導に生かされた。
・事後報告を作成し、話し合いを行うことで、教職員の共通理解が図れた。

課題
・全員の授業を参観できることが理想であるが、時間的に難しく、参加可能な者が少ない場合もあった。参加形態をどうするかは今後の課題である。

研究成果が見える研究に！

Q16を受けて 実践例

中規模校を想定した授業研究計画
― 様々な手法を組み合わせて ―

効率的に授業研究会を行うには どのような計画がよいですか？

Point

「学年会の時間を確保したい。」「教材研究の時間が欲しい。」「生徒指導に力を入れたい。」など、わたしたちには時間がいくらあっても足りません。「授業研究会を充実したものにしたい。」とは思うものの、会議が増えるのは困ります。

① 無理のないペースで授業研究会を計画

グループ事前研究会 ⇒ 授業公開 ⇒ 全体事後研究会

② ２月に研究発表会を設定

会議を少なくし、効率的に、また授業研究を充実したものになるように計画をしましょう。

三月

昨年度の研究成果と課題の整理

四月

研究主題の設定
・研究組織、計画の確認
・部会の具体的な動きを作成

研究主題はこうして設定する
◇ 昨年度末にまとめられた成果と課題をベースにして設定する。
◇ “自校の児童生徒像”について教師にアンケートをとり、よさや課題を明確にし、児童を１年後どのような姿にしていくのかをしっかり想定して設定する。
◇ 研究主題を読み、授業を見れば「なるほど！」とわかるものにする。

研究主題は、ともすれば決めただけで忘れてしまうことも… 常に目につくところに掲示して意識化を

五月

第１回 授業研究会
・転任者に説明のできる授業
・研究の課題を明らかに

第１回はモデル型授業で
◇ 第１回は、転任者に対して自校の研究内容が伝わる授業研究会、全体に対して今後１年間の研究の方向性を明確にする授業研究会にする。
◇ 昨年度、研究の中心となってきた教員の授業を公開する。
◇ 昨年度の研究で大切にしてきたことを確認できる内容にする。
◇ 今年度の児童生徒の課題を的確に分析し、明らかにできる内容にする。

六月

第２回 授業研究会
・第１回授業研究会を受けて研究の課題を解決する手法を探る

七月

第３回　授業研究会
・７月初旬に実施

指導案作成から事後研究会まで

第４学年担任で指導案検討

模擬授業
先行授業

第３学年及び第４学年担任で指導案検討

授業公開

事後研究会

夏季休業中

１学期の成果と課題を整理
・児童生徒にどんな力が身に付いたのか
・教師は児童にどんな力を身に付けることができたのか

２学期の授業研究の方向性を確認
・ココを大切に授業を創ろう！
・３月の児童生徒の姿をイメージ
・研究発表会の計画案を作成

夏季校内研修会

授業研究会は１時間（時間厳守）。
グループごとの研究会をそのあとにセッティングします。

九月

十月

第４回　授業研究会
・夏季校内研修会で確認した内容を盛り込み授業提起

十一月

第５回　授業研究会

十二月

第６回　授業研究会

一月

研究発表会　授業公開
・研究の１つの通過点としての研究発表会を開催

二月
三月

研究の成果と課題を整理
・児童生徒の成長で検証
（目指す児童生徒の姿が達成されたかどうか）

授業研究会の記録は大切！担当を決めて残そう

◇　出張や児童生徒対応などがあり、授業研究会に全員が参加できることはほとんどありません。全員が同じ歩調で研究を進めるためには、授業研究会の内容を、**研究だより**を通して共通理解を図ることが大切です。ただし、**研究だより**の作成には多くの時間を費やさないようにしましょう。

短時間で作る研究だよりの例

研究のあしあと②

平成〇〇年６月８日（水）

（第２学年研究授業事後研究会）より

意見交流から…
授業者のひとこと（学年から）
・児童の予想しない反応があった。
・テープ図の必要性を考えるのはむずかしく多くしゃべりすぎた。
・問題場面を児童が十分理解できていなかった。劇や紙芝居での導入も考えてきたが本時では問題文だけの提示にした。どちらがよかったのか？
児童の姿
・よく発言し、いっしょうけんめいに考えていた。

今後に生かす点（こうありたい）
・めあてがよかった。「図を見て？の数を考えよう」は低学年児童が飛びつくめあてだった。
・児童の発言の中に、ポイントを見出し、広げるテクニック
・児童の話し合いにズレが生じたときには教師が修正する。
・児童の立場にたった発問
今後の課題（引き続き追究する点）
・児童の実態、教材の特性に応じて、指導計画の思い切った組み替えを考えていくことも大事では…。
・自力解決の時間の保障と個への手だて
確認事項
・
この言葉
校長先生より
・低学年ブロックの度重なるブロック研について「積み上げの大切さ」
・自分に厳しく　「これでいい」ではなく「よい授業」を日々目指す姿勢が大切

連絡・確認事項

くらし部より
・　道徳の時間等を使って「時と場合に応じた言葉遣いと態度、それらに相応しい話し方や内容を普段の学習や生活の中で育成する」という提案がありました。各学年の発達段階に応じて、この目的に近い形で授業、指導を実施して下さい。

実践のポイント

限られた時間内での授業研究会です。感想や印象の集約にならないよう、また批評だけでなく「自分なら…」といった提案のある議論を展開していきましょう。

ヒントボックス

授業研究会の雰囲気を変えてみるのも有効です。Ｑ７やＱ８を参考にＫＪ法や少人数グループによる話し合いにもチャレンジを！

Q16を受けて 実践例

無理なく研究会を実施する

― 教科部会と全体研究会を組み合わせて（中学校の例）―

教科部会と全体研究会を組み合わせて 効率的に授業研究会を行う

Point
　授業参観の前に「授業参観シート」を配付するのも効果的です。会合に参加できなくても授業改善につながる意見を知ることができます。教科が違う授業を参観する場合や小規模校の場合は、特に参観シート（評価カード）の記入項目（指導技術や方法を中心に）には注意が必要になります。

年度当初	全　体　会	・研究主題や研究組織・計画等の確認
	各教科部会研究会	・教科部会ごとの具体的な研究方法や計画等を確認
一学期	学習指導部会	・各教科部会の実施日が重ならないように調整 ・授業参観週間の実施　　※全教員が必ず１度は授業公開 ・参観シート作成
	授業参観週間	・参観者（含教科外）は参観シート（評価カード）を記入 ・授業者は参観シート（評価カード）を見て自己分析
	各教科部会研究会	・事前研究会・研究授業・事後研究会の実施
夏季	全　体　会	・各教科部会の授業研究の成果と課題の交流 ・２学期に向けて改善方策の検討と指導案作成
二学期	授業参観週間	・参観シートの活用 ・保護者参観、地域連携、小中連携と同時開催
	各教科部会研究会	・事前研究会・研究授業・事後研究会の実施
	全体授業研究会	・各教科部会後全体での事後研究会の実施
冬季	全　体　会	・各教科部会の授業研究の成果と課題の交流 ・３学期に向けて改善方策の検討と指導案作成
二学期	授業参観週間	・参観シートの活用
	各教科部会研究会	・事前研究会・研究授業・事後研究会の実施 ・１年間の成果と課題の整理、次年度への方向性の確認
年度末	全　体　会	・各教科部会の授業研究の成果と課題の交流 ・次年度に向けて重点課題と改善方策の検討
	次　年　度	

Q17を受けて 実践例

研究に継続性をもたせる取組(1)

― 教科内ミニＰＤＣＡ ―

授業研究が単発に終わります。継続性をもたせるには？

Point
　学習指導案の作成から研究授業、事後研究会での対応、資料の保管に至るまで、全て授業者が一人で行っているということはありませんか。
　研究授業等は教科部会のメンバーで担当することをお勧めします。

個　人　の　限　界

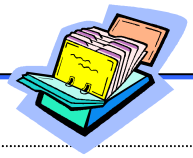
　研究テーマは学校全体で決められているにしても、テーマにどのような指導方法で迫っていくのか、そのための教材・教具をどのように工夫するのかなどを考察するとき、授業者一人で行うことはやはり限界があります。事後研究会等においても、研究授業の評価はおもに同じ教科の教員からされます。結局、研究授業で得られた成果は授業者にしか還元されず、なかなか全体のものになり得ません。

教科から全体へ主張・提案を

　学習指導案とは、それを見ればテーマ達成のためになぜ今回のような授業になったのかが分かる、手品で言うと“種明かし”のようなものです。その“しかけ”がどのようであれば効果的に子どもたちに作用するのか、事前研究会としての教科部会でじっくり検討しておくことが大切です。そこに教科としての明確な主張・提案を盛り込み、それを他教科へ発信するという意識をもつことで、研究授業はより全体のものとなります。

教　科　内　ミ　ニ　Ｐ　Ｄ　Ｃ　Ａ

　研究授業の全体の事後研究会が終われば、次に教科で事後研究会をもちましょう。そこで明確になった課題を今後どのような手立てで克服していくのか、成果を授業者以外の教員がどのように授業に取り入れていくのかなどを話し合います。その手立てを実行しつつ、教科部会で子どもたちの変化の様子を交流しながら、新たな課題を発見し、次の授業・研究授業へとつないでいきます。
　このように、ＰＤＣＡのマネジメント・サイクルを教科で活用することで、授業研究を教科内で継続的に行っていくことが可能になります。さらに、学習指導案や授業で用いた教材・教具などは単元ごとに教科で確実に保管、蓄積し、これからの研究授業の大切な資料として活用しましょう。



ＰＤＣＡのマネジメント・サイクルを教科で活用

1	研究授業に向けて指導内容・授業の流れの考察	授業者	PLAN
2	研究テーマに迫るための方策を模索	授業者	
3	事前研究会(教科部会)で検討・手直し	教　科	
4	研究授業	授業者	DO
5	事後研究会（全体）	全教員	CHECK
5	事後研究会（教科部会）	教　科	
6	教科の主張・提案を各教師が自分の授業で実践	各教員	ACTION
6	改善点を加えた授業で実践　子どもの変化の観察	教　科	

新たな課題の発見！

ノートの紹介例

教科の主張・提案の具体例

国語科　「ノートの作り方」

ノートの具体的な活用方法として、漢字練習、語句の意味調べ、力の付くよいノートの紹介などをしながら、ノート作りを指導します。

美術科　「鑑賞タイム」の取組

これだけは知っておいてほしい美術作品として、授業の最初の15分や新しい題材に入る導入段階に、「鑑賞タイム」として少しサイズの小さいＢ５用紙のワークシートを使い、１回に１作品を紹介することを基本として行います。美術作品や文化遺産が出来上がった時代背景や作者の生き方、隠された作品への思いや表現を“よむ”ことをねらいにしています。

実践のポイント

指導方法や授業での子どもの様子など、教科内で日ごろから情報交換することを心掛けましょう。そのためには、教師間でのコミュニケーションをしっかりとり、意見が言いやすい雰囲気を創っていくことも大切です。

ヒントボックス

アンケートを実施し、先生方が授業に取り入れたいと思っている指導方法などを事前にリサーチしておくと、校内研修推進の各場面で、授業者や発言をお願いしやすいなど、いろいろと便利です。

Q17を受けて 実践例

研究に継続性をもたせる取組(2)

― 実践資料ファイリングの工夫 ―

Point
授業研究の記録をきちんと残し、いつでもだれでも活用できるようにする。

授業記録や資料を活用できるように保存

研究紀要など紙ベースでは活用しにくい。

そこで

みんなのものにするために！

コンピュータを活用して整理
・保管場所をとらず、いつでも誰でも手軽に活用できる必然性から

ファイリング作業
・情報管理を行う分掌と連携して行い、研究だけでなく、教務や他分掌でも収集・整理

データベース作成
・実践内容や指導案をデジタル保存し、定期的にバックアップ

Check!

そうすることで…

知を蓄積し、引き継ぐことは人材育成にも役立つ！

情報機器を活用して整理

コンピュータ共有サーバに保存

① 目次作成　② フォルダ作成工夫

検索したい言葉・文字を入力すると、その言葉・文字を含んだファイルや文章を探し出すことができます。

ファイル検索ソフトの導入

「デスクトップ」のアイコンをクリックして探したい文書や言葉、関係のある言葉を入力します。しばらくすると全データの中から関係する文書の検索結果が得られます。必要な文書はコピーして使用することができます。インターネットでの検索と同じように探し出すことが可能です。ぜひ活用してください。

また、自分が校務分掌で作成した文書や校内研究で作成した指導案、ワークシート、授業記録（写真）等は共有ＰＣに保存するようにお願いします。必要なものは個人でコピーして個人持ちにします。共有文書をもとにして「改善」した自分の実践記録などは忘れずに共有文書に返すようにしましょう。

実践のポイント

保存すること自体が目的ではなく、保存した資料が活用しやすい状態になっていることが重要です。

自作の教材や授業の様子が画像データとして残っているだけでも授業準備にかかる時間は大きく減少されます。

従来、写真で行っていた作業もコンピュータ上ではすばやく行えると好評です。

ヒントボックス

上のような文書を配付し、機能の利便性をアピールし積極的に活用してもらえるようにします。利用頻度が増えるほど充実したデータベースにすることができます。

Q17を受けて 実践例

研究に継続性をもたせる取組(3)

― 実践資料のまとめ ―

授業研究に継続性をもたせるには？

Point

授業研究がその場限りで終わってしまわないために、次のような取組が有効です。

① 研究主題に沿った授業を見る視点を決める。（ハンドブックＱ４を参照）

〈 事前研究会と研究授業と事後研究会をつなぐ 〉

② 毎回の研究が関連し発展するように「研究部だより」を出す。

〈 授業と授業をつなぐ 〉

③ 今年度と次年度の研究が関連し発展するようにまとめの冊子を作成する。

〈 年度と年度をつなぐ 〉

〈授業と授業をつなぐ〉研究だより

ＰＤＣＡのマネジメント・サイクルを活用します。

研究授業

ＰＬＡＮ（計画）
- 前回の授業の成果と課題を受けて、指導内容や研究主題に沿った授業を見る視点を決める。（ハンドブック P.8 参照）

ＤＯ（実行）
- 学習指導案を作成する。
- 研究授業を実施する。

ＣＨＥＣＫ（評価）
- 事後研究会を実施し、成果と課題を明確にする。

ＡＣＴＩＯＮ（改善）
- 成果と課題を受けて、次回の授業研究や日常の授業実践に生かし、実践する。

研究だよりでつなぐ

次の研究授業

ＰＬＡＮ（計画）
- 前回の授業の成果と課題を受けて、指導内容や研究主題に沿った授業を見る視点を決める。

ＤＯ（実行）
- 学習指導案を作成する。
- 研究授業を実施する。

ＣＨＥＣＫ（評価）
- 事後研究会を実施し、成果と課題を明確にする。

ＡＣＴＩＯＮ（改善）
- 成果と課題を受けて、次回の授業研究や日常の授業実践に生かし、実践する。

研究だよりでつなぐ

研究授業を単発で終わらせてしまうと、研究は深まりません。

研究の継続性をもたせるためには、研究授業終了後に、「授業を見る視点」に照らした成果と課題を「研究だより」などで発信することが大切です。

〈年度と年度をつなぐ〉まとめの冊子

また、年間の研究のまとめを冊子にして残しておくと、今年度の研究を次年度の研究に生かしやすくなります。研究推進計画、学習指導案、研究のまとめの他、学習計画、ワークシート、ノートや児童の感想なども入れておくと、すぐに使え、数年後の教員も使える冊子ができます。

今年度の研究 Ｐ・Ｄ・Ｃ・Ａ

まとめの冊子でつなぐ

次年度の研究 Ｐ・Ｄ・Ｃ・Ａ

研究だより

◆　研究部で作成し、全教員に配付します。

校内　学びのナビ

３年生　　すがたをかえる大豆

学期末１２月のお忙しい時期の公開授業ありがとうございました。３年生で文章構成を理解させるという難しい授業でしたが、丁寧な教材研究と深い児童理解がされており、事後研では「児童の成長が見える授業であった」という意見が出されていました。

授業者から(授業を終えて)

- 「すがたをかえる大豆」という教材は、文章構成が分かりやすく、３年生にも理解しやすかった。
- 一人学びを前時にやっておいてよかった。丁寧に一人学びに取り組む時間が取れたので、全員自分の意見をもつことができていた。
- 間違った意見を出した児童が、友達の意見を聞いた後、自分の意見を修正することができていたのがよかった。

理由付け発言ができているか

- だれもが、自分の意見を理由をつけて発言する事ができていた。理由が似ていても、自分の言い方で発言できていてよい。
- 意見を言うときに、「○○ちゃんと同じで」「○○くんとはちがって」など、友達の意見と自分の意見を比較しながら理由付け発言ができていた。
- 理由の言い方を授業者が指導していてよい。(例「初めに『どこで分ける』を言ってから理由を言おう。」「１、２段落は、・・・という言い方をするとわかりやすいね。」など。)

本時のめあてが達成できているか。　中心発問は適切か。本時のめあてを達成するための支援は適切か。

- ほとんどの児童が同じ意見だったときに、あえて教師側から児童と異なる意見を出し、児童の思考を揺さぶっていった。そのことを中心発問とした。児童は、再度思考することで本時のめあてに迫っていった。
- 中心発問の答え（７段落、８段落の間で分かれること）の押さえが丁寧でよかったが、丁寧すぎて時間がかかってしまったので、もっと省略すべきであった。
- 文章構成を考えるとき、内容によって意味段落を考えている児童が多かったが、言葉に着目して考えることも大切であるので、「このように」という接続語にもっと着目させるべきであった。

学びの確かめについて

- 学びの確かめを「段落のまとまりを考えるときは、どのようなことをヒントに考えるといいでしょう。」と視点を指定して書かせた。そのほうが書きやすい児童もいたが、かえってしばられてしまい、書きにくい児童もいたので、もっと自分の言葉で書かせたほうがよかったかもしれない。

―学びの確かめより―

○　段落のまとまりを考えるときは、どのようなことをヒントに考えるといいでしょう。

作成のポイント

研究授業の成果と課題

その授業の成果と課題を研究主題や「授業を見る視点」に沿ってわかりやすくまとめる。

研究部でまとめる

事後研究会の後、研究部会を開き、成果と課題を確認したうえで担当者が作成する。

共通理解を図る

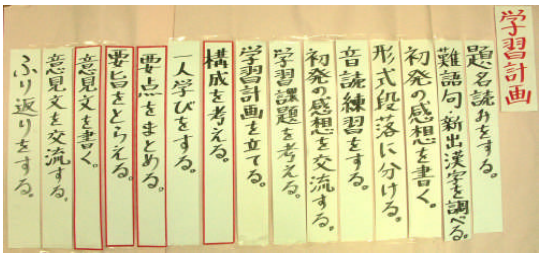
できるだけ早く配付し、読み合わせをするなどして、次の授業や日常の授業実践に生かせるようにする。

年間のまとめの冊子を作成する

◆　いつも手元においておけるので、すぐに活用できます。

研究推進のまとめ

- 研究推進計画、学習指導案、研究だよりを残します。
- 板書、掲示物は写真にして残します。
- 使用したワークシート、ノート、感想も残しておくとすぐに活用できます。
- 年度当初に冊子に何を残すかを全教員に知らせて研究部で保管し、年度末に印刷して冊子にして配付します。



資料集

- 学習指導要領を整理したもの、児童に付けたい力、学び方の系統性、学年に応じた学びの確かめなど長く使うものは、資料集として残します。

実践のポイント

いつも手元において活用することが重要です。

研究だよりを読み合う、ブロック研究会でまとめの冊子や資料集を活用するなどの機会を研究部で企画することも大切です。

ヒントボックス

研究主題に沿ってブロック研究会をもち、教師同士の学び合いを大事にして全体研究会につなぐことが研究を深めることになります。

Q17を受けて 実践例

研究に継続性をもたせる取組(4)

授業研究が単発に終わります。継続性をもたせるには？

Point

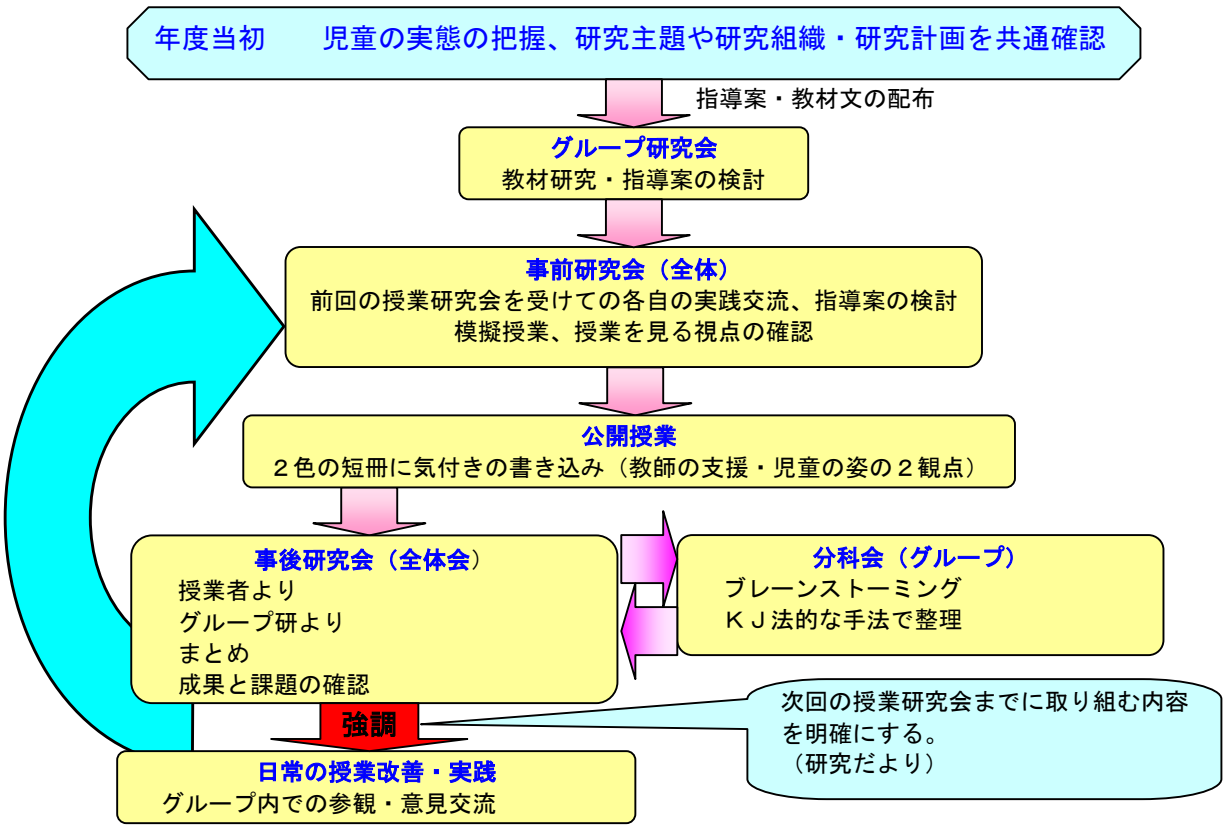
授業研究がその場限りで終わってしまわないために、次のような取組が有効です。

① 毎回の研究が継続性をもち、より発展するように具体的な推進計画を作成する。
② 授業研究の成果と課題を全教員が共通理解し、日常の指導に生かせるようにする。
③ 授業研究の記録を残し、いつでも活用できるようにする。（ﾊﾝﾄﾞﾌﾞｯｸｐ34 参照）

日常の授業改善

研究授業後明らかになった課題点は、授業者だけのものではなく、学校全体のものととらえることが必要です。「授業研究のときは深く研究するが、その単元が済めば終わり」にならないように、また授業者以外の教員もその授業から学び、また日ごろからグループ内でのミニ参観・意見交流を活発に行って、常に自分の指導を振り返るようにすることが大切です。互いに課題を意識し、積極的に授業を公開する中で、授業改善を図ることができるのです。すべての教員が日常の指導の在り方を見直し、次の研究授業までにそれぞれが実践を積み重ねていくことにより、さらに研究を深めていくことができます。

授業研究に継続性をもたせる取組



次の事前研究会（全体会）のときに実践交流する場を設定

実践者の声

授業者だけでなく全体の課題としてとらえることが大切です。
次回の事前研究会で自分の実践を交流する場を設けます。

ヒントボックス

研究主任が研究の成果と課題を「研究だより」などで発信することで、互いに課題を意識し、その上で授業を公開する中で、授業改善が図れます。

Q19を受けて 実践例

中学校における校区内小学校との小中連携による合同研修

小中連携を深めながら、教員の専門性を高め授業力の向上を図りたいのですが？

Point
① 小学校教員の指導から、優れたところやよいところを学ぶ。
② 自分の授業を振り返り、小中のスムーズなつなぎを考える。
③ 専門性を生かし、授業を行うことで、実践力を高める。

小学校のよいところから学ぶ

小学校の授業を参観すると、**考える時間**を多くとっている様子、**発言**を大切にしている様子、**練り合い**を大切にしている様子を観ることができます。指導量や指導時間の制約もありますが、中学校ではそのような授業の形を意識してつなぐことができているでしょうか。もっと自ら考え、自ら表現する授業を計画的に取り入れ、その意識を強くもつためには、小学校の授業を参観することが大変参考になります。

自分の授業を振り返る

小中合同の授業研究会を行い、１学期のまとめをうけて、小中のスムーズな学びの接続を意識した指導案を作成し、研究授業を実施します。中学校にとっては、考える場面、表現する場面等を意識し組み立てることで、今までの授業を振り返り、改善することにつながります。

専　門　性　を　生　か　す

中学校教員が小学校の学習状況を理解して授業を進めることは容易なことでありません。そこで、自分の**専門教科**に関する授業を参観、また３学期は学習指導に参加することで、小中学校の学習のつながりの理解を深めることができます。また、小学校の教員にとっても、中学校の教員がＴＴまたは**出前授業**（高学年）を行うことにより、小中学校の授業のつなぎの参考にすることができます。

校内の授業研究会に生かす

この１年の流れを小学校ごとに資料にまとめ、小中に共通する課題と成果を来年度につないでいきます。校内での授業研究会でも、これらの視点を生かして、授業力向上を目指し、教師力を総合的に高めていけるでしょう。

「Ａ中学校の年間研修日程」の例

◆６小学校に年間を通して教員を割り当てる。（１校４～５名）

一学期

授業参観

・学校全体の実態把握
・授業評価表を使用し、小学校へ返却
・授業評価表を使い、校区の小学校の実態交流

夏季休業中

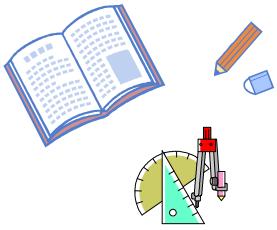
小学校 校内研修参加

・学習指導の交流
・生徒指導の交流
・実態把握

二学期

小・中学校 合同授業研究会

・中学校１年生（国語・数学）で研究授業の実施
・事後研究会に参加



三学期

授業参観

・自分の専門教科に関連する授業に絞って参観
・事後研究会に参加

授業参観

・自分の専門教科に関連する授業に参加
・小学校の先生とのＴＴによる授業
・出前授業の実施
・事後研究会で研修

実践のポイント

年度と年度の連続性・発展性を考慮して、積み上げる。

ヒントボックス

研究指定校の研究発表会等をうまく活用することで、合同研究会開催などの活性化に結びつけることが大切です。

Q20を受けて 実践例

研究仮説の深化を目指した年間計画

Point

授業研究を熱心に取り組み研究に活気がある学校や研究指定校では、研究仮説に沿った実践が有効であったか、どう改善していくべきかを検証し、より高い目標を目指して一層の充実を図るために、年間を見通した計画が必要です。次の４つの視点を大切に授業実践年間計画を立てました。

① ＰＤＣＡのマネジメントサイクルを活用する。
② 教員一人一人の研修へのニーズと、自己目標を明らかにし、計画に生かす。
③ 授業研究を日常の実践や研究と結び付け、効率的に運営する。
④ 授業研究会の位置付けを明確にし、研究仮説に沿って授業改善を深める。

年度当初

全体会
- 研究主題や研究組織・計画等を確認
- 部会ごとの具体的な研究方法や計画等を確認
- 教員一人一人の個人研究テーマの決定

ぜひ、年度当初に・・・
Q12 を参考に、「よい授業」について検討し、全教員の共通理解を図りましょう。今後の授業研究会でどの視点を一番大切にしていくのかを確認することができます。また、話し合ったことをもとに、教員一人一人が自分の研究テーマを設定します。研究に対する意識向上にもつながります。

一学期

１５分間授業参観週間

モデル型授業研究

日ごろから気軽にお互いの授業を見合い、意見を交換していることの積み重ねが、教員の資質向上や児童理解につながります。初任者のいる学校では、学級経営の在り方を学ぶ機会ともなります。
「話し合い活動の充実」「板書」「ワークシートの活用」など参観してもらう授業のポイントを絞って全学年が公開すると、より効果的です。

夏季休業中

全体会
- 一学期に取り組んだ研究の成果と課題の話し合い及び、二学期に向けての確認
- 二学期に実施する指導案作成
- 外部講師を招いての講演会・研修会

「本校の研究の方向性は、このままでよいのだろうか」「もっと有効な方法はないだろうか」など、実践を進めていく中では様々な課題が出てきます。京都府総合教育センターの出前講座、大学の研究者、また授業について素晴らしい実践を行っている地域のリーダー的な教員などの外部人材を講師として積極的に活用しましょう。
（Q10 参考）

二学期

部会　部会　部会

提案型授業研究会

学年毎、教科、テーマ別、など少人数の部会を効率的に設定します。このような機会を生かして、できるだけ全員が研究授業を行うようにしていきます。また、取組の内容をブロックごとにまとめ、全体に広げることも大切です。

冬季休業中

全体会

- 二学期に取り組んだ研究の成果と課題の話し合い及び、三学期に向けての確認
- 児童アンケートの作成

ＰＤＣＡのサイクルを生かして
学期ごとの振り返りを！

研究授業が済めば終わりでなく、その成果と課題を振り返り、次回の研究授業の方向性を確認することが大切です。「研究だより」などを発信することで、全教員の共通理解を図ることができます。

三学期

検証型授業研究会

研究が教師の自己満足だけに終わらず、児童の成長に結び付いているか、児童のためのものとなっているか、アンケートを通して成果と課題を確認し、来年度の研究の方向性を見直す方法もあります。

児童アンケートの実施

年度末

全体会

- 児童の実態や児童アンケートをもとに、本年度の研究の成果と課題をまとめる。
- 来年度の方向性を協議

来年度へ

研究授業の位置付けを明確に

「モデル型授業研究会」

昨年度までの研究の成果を生かした授業を行う。今までの研究の方向性を全体で確認し、本年度の成果と課題を明らかにする。

「提案型授業研究会」

理論研修、先進校視察、個人研究によって深めた視点を取り入れ、新しい方策を提案し、その成果と課題を明らかにする。

「検証型授業研究会」

本年度の研究内容を生かして授業を行い、一年間の研究の取組が児童の成長の姿としてどのように現れているか検証する。

Q20を受けて 実践例

校内授業研究会実施計画の策定

こんな進め方をしました

目　的

(1) 授業に対する生徒や教師の考え（思い）を生かして、授業改善を図る。
(2) 互いに授業を参観し、意見交流をすることで授業改善を図る。

公開授業実施までの取組

① 生徒にアンケートを実施する。
② 教師にアンケートを実施する。
③ アンケートを分析する。
（※①～③は「市川伸一著『学ぶ意欲の心理学』(PHP 新書)」を参考にしました。）
④ 教師が公開授業におけるテーマを決定する。
⑤ 事前研究会を実施する。
⑥ 公開授業を実施する。
⑦ 事後研究会を実施する。

アンケートを分析した結果、想定されるテーマの候補例

各教師がテーマを１つ選び、公開授業を実施する。
・生徒個々が認められる場面があるか　（生徒を励ます声かけなど）
・生徒が自己選択・自己決定できる場面が設定されているか
（自分で選べば、責任が生まれる。
やってみたい気持ちが膨らむ。）
・生徒の気付きの場面があるか
（教師の説明より生徒が気付くほうが理解が深まる。
すぐに答えを言わない。）
・生徒主体（活動的）の授業であるか
（教師の説明より生徒同士のかかわりや生徒の活動が多くあるか。
教師がしゃべりすぎない。）

実　施　計　画

(1) 年５回の公開授業実施
・１学期２回、２学期２回、３学期１回
・全員が１回以上は公開する。
(2) 学年ごとの授業公開
・３人が同時に授業公開を行う。
・該当学年教員の授業を参観する。
・５時間授業日の６時間目に公開授業を行う。
(3) グループ構成
第１回目　グループＡ（校長、１学年教員）
グループＢ（教頭、２学年教員）
グループＣ（教務、３学年教員）
第２回目　グループＡ（教務、１学年教員）
グループＢ（校長、２学年教員）
グループＣ（教頭、３学年教員）
第３回目　グループＡ（教頭、１学年教員）
グループＢ（教務、２学年教員）
グループＣ（校長、３学年教員）
第４回目以降のグループ編成については、３回分のまとめをし、より効果的に行えるように意見交流をして決定する。

事　前　研　究　会

事前研究会の持ち方

授業公開前に指導案を使って、事前研究会を各グループで行い、テーマにどのように迫るかについて論議する。そのことにより、実践者も参観者も意識が高まり、より多くのことを学び合うことができる。必要に応じて指導案を訂正し、公開授業に備えることも可能となる。
① グループごと（３グループ）に事後研究会を実施する。
② 役割分担　→　授業実践者　支援役　物言い役　時間役　記録係等
③ 進め方
ａ　授業実践者が、授業の感想（テーマにどのように迫ったか）などを述べる。（２分間）
ｂ　支援役が、よかったことを述べる。（２分間）
ｃ　物言い役が、授業の改善点を述べる。（２分間）
ｄ　授業実践者が、物言い役の意見に対して答える。（２分間）
以上のａ～ｄのサイクルを、役割を変えて繰り返す。（５人いれば、４回実施する。）

Q22を受けて 実践例

教科の壁を越える実践例(1)
ー授業イメージを持ち、共通理解しよう ー

研究授業を始める前に
研究部門が中心になり、先生方に提案しよう

Point

「こんな授業を目指そう」という授業イメージが、みんなに必要です。

まず生徒の共通する課題を確かめよう

教科の専門的な知識に口を出しにくい。だから、校内授業研究会では「板書がうまい」「声が大きくて丁寧」「児童生徒の私語がない」等、当たり障りのない発言になりがち。そもそも、授業研究会は、教師の指導力向上を図るためのもの。つまり、児童生徒の学力充実向上のために行うもの。

では、児童生徒のどんな学力を伸ばすのか？

自校の実態から、今、子どもたちに何が一番必要かを考えることから始めましょう。ポイントは、『考える力』『感じる力』『想像する力』『表す力』。児童生徒の学習活動を根底で支えている力は、どの教科にも共通した課題であり、学校全体で育てるべきものです。

授業イメージを持ち、教師が共通理解しよう

どんな授業が児童生徒にとって「よい授業」なのか？目指す授業を考える際に、例えば、「伝え合い、理解し合うことによって、一人一人の子どもたちの学習が深まっていくのではないか」、また、「その過程において、子どもたちは学習の楽しさや成長の喜びを感じ、より確かな学力をつけていくのではないか」とイメージしてみます。すると、自校児童生徒の今できていない(教師がさせていない)学習活動が見えてきます。そこが、授業改善のポイントであり、校内授業研究会のテーマになってきます。　　(教師自身にも「感じる力」や「想像する力」が必要)

研究部門が１年間の流れを明確に

私たちは授業で、「ねらい」を達成するために「導入→展開→まとめ」という組み立てを毎時間行っています。研究活動も同じです。研究部門が「先生」、教員が「児童生徒」とすれば、１年間に行うそれぞれの研究授業(研究会)は、研究目的を達成するための「導入／展開／まとめ」のどれに相当するのでしょうか？

例えば４月、研究主題が決まる。では、１学期第１回目の研究授業はどんな目的で、誰が公開授業を行う？　例えば夏季研修会、１学期の研究活動を受けてどんなテーマで話し合う？

そして２学期の研究授業、どこに焦点をあてる？　そういった「１年間の流れ」のイメージを、研究部門は持っておく必要があります(適宜修正しながらでよい)。

「研修計画にあるから」と、目標や目的を見失った授業研究会を繰り返していては、全く効率の悪いものになってしまいます。「忙しいが、やってよかった」と教員が“分かる(深まる)喜び”を感じるよう、研究部門が研修計画の中身を充実・深化させましょう。

「どの教科でも、その学習目標を達成するために、子どもたちに必要な力」は何なのかを、研究部門がはっきりさせましょう。この実践例では、研究主題に沿って「それは、伝え合う力だ」と考えています。そして、「伝え合う力」を授業の中ではぐくむ３つの条件を、「研究主題の具体化」として先生方に提案しています。

研究主題と授業改善

研究主題
「生徒の表現力・コミュニケーション能力を育成する魅力的な授業づくり」

伝え合う力の育成 → 魅力的な授業

表現力
コミュニケーション能力 の育成

通　常

教　材

A

理解する

目指す授業

表現力・コミュニケーション能力の育成

教　材

考える力
感じる力
想像する力
表す力

A ⇔ B

考える力
感じる力
想像する力
表す力

伝え合う

研究主題の具体化

授業でのポイント

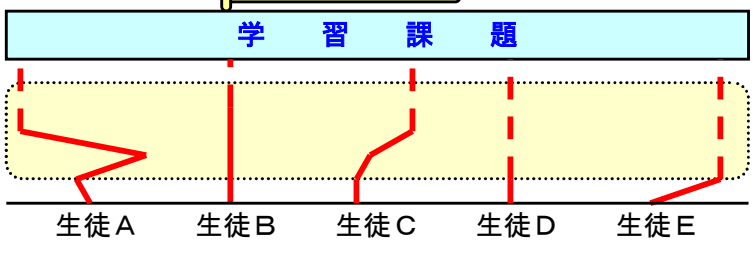
① 課題設定（１授業に課題は１つ～２つが望ましい）
- 課題はできるだけ単純に、また生徒が興味を持つものが望ましい。
- 課題は４つの力のどれか（あるいは複数）を育成するものであること。

② 生徒の活動（個別またはグループ）
- 課題に取り組む（＝生徒の活動）場合の設定→個別、グループ
- グループで取り組ませるときの仕掛け→グループは４人（男女混合）が望ましい。
- 課題の解決方法を伝え合う→グループ及び全体で

③ 学びの共有化（グループ及び全体）
- 教師の説明は最小限に（生徒が自分で考えるんだという姿勢）
- 全体場面で「生徒→生徒」の発表スタイルを確立する。（×「生徒→教師」）
- 全生徒が理解するための大切な仕掛け

目指す授業

生徒同士の「伝え合い」による学びの共有化



学習過程

Q23を受けて 実践例

教科の壁を越える実践例(2)
ー児童生徒が生き生きとする学習指導案をー

研究授業が始まったら
一人一人の先生が自覚を持って

Point
どの先生も「こんな授業を、自分もやってみよう」と思える工夫が必要です。

児童生徒が生き生きとする学習指導案を

指導案には、専門的な知識･技能･態度の習得にかかわる部分があります。そこは、教科内で十分に論議すればよいでしょう。大切なのは、他教科の教師が「自分もやってみよう」「授業を参観して収穫があった」と実感できる指導案であることと割り切って初めて、公開授業が学校全体のものになります。

そのためには、教科外の誰が見ても「この先生の工夫点はここだな」と分かる指導案、「子どもたちにこんな活動を望んでいるのだな」と児童生徒の姿が見えてくる指導案が必要です。高尚な理論や緻密な計画の記述されているものがよい指導案ではありません。　（教師自身にも「表す力」が必要だ）

研究目的に沿って授業参観の観点を明確に

自分たちの「目指す授業」を組み立てている中心的要素と付随的要素を整理しましょう。例えば「伝え合う力の育成」を目指している場合は、次の点が参観のポイントになります。どの先生にもわかりやすい観点を提示しましょう。

大きなテーマとして「研究主題を達成している授業であったか」

① 課題設定　　わかりやすい課題か
　　生徒が興味を持って取り組める課題か
　　伝え合うことのできる課題か
② 生徒の活動　　グループでの「伝え合い」の場面はどうだったか
　　全体での「伝え合い」の場面はどうだったか
③ 生徒にとっての学び
　　生徒は授業の中でどう変わったか
　　生徒にとって魅力的な授業だったか

事後研究会の原則

事後研究会は、「子どもたちの学習がどう変わったか」を中心に据えた研究会です。児童生徒は、「学習課題の確認→学習活動→学習の振り返り」を通して学力を高めていきます。その３点にどのような工夫をしたときに児童生徒がどう変わったのかを確かめ、学び合うのが、事後研究会です。

したがって、事後研究会の原則は、次のように考えましょう。

・個々の教師の技量は問わない…「あの先生だからできる」はダメ
・教科の枠をこえて発言する…「専門外なので分からない」もダメ
・討議の柱をはっきりさせて考える…子どもの変容について考える

事後研究会の進め方

事後研究会の討議の進め方は、模擬授業のつもりで新しい試みをしてみましょう。例えば、授業研究会のテーマが「ブレーン・ストーミングによる学習の深化」ならば、教師自身もブレーン・ストーミングを体験しましょう。「４人グループによる話し合いの活性化」ならば、教師も４人で話し合い、プレゼンテーションをしてみましょう。自分たちの目指す授業のイメージを持ちながら教師自身が討議を進めて授業改善の方向を探る試みの中から、多くのことを学ぶことができることでしょう。

この指導案は、「伝え合う力の育成」を目指した中学校家庭科の実践例です。「正しい方法を身に付ける」ではなく、「よりよい方法を考える」ことを学習目標にしました。また、「鍋でご飯を炊く」「途中でふたを開けて観察する」等、伝え合いが充実･深化する条件を整備し、生徒の活動が活性化する工夫をしています。生徒の学習活動と教師の工夫が、誰にでも分かるように書かれています。

家庭科学習指導案

（ １～４　省略 ）

５　学習のねらい　（全１時間）

① おいしい炊き込みご飯を作るための**方法を探る**。

（ ② 以下　省略 ）

６　授業改善の視点

① 炊飯中に鍋の中を観察し、よりおいしい作り方を**話し合い、試す場面**を設定した。

② 試食後、**自分たちの方法を評価**し交流することで、学習の広がりを図った。

７　本時の展開

過程	学 習 活 動	主 な 発 問 予想される生徒の反応	指導上の留意事項
展開	**知る** ・本時の課題を知る。		
	話し合って考える ・調理レシピの空欄を自分たちで埋める。	・炊き込む火加減と時間についてグループで話し合う。	・**炊飯中に鍋のふたを取って中身を観察してもよい**と、生徒に提示する。
	確かめ合う ・試食して、できばえを確かめ合う。	・おいしくできた･できなかった理由を出し合う。	
まとめ	**考えを広げる** ・グループで発表し、考えを広げる。 **まとめる** ・自己反省カードに記入する。	・炊き込みご飯のできばえと火加減･時間について発表する。	・実習によって**気付いた事柄を大切に**評価する。

□ 内に、各教科に共通する力を明記し、他教科の先生方にも生徒の活動が見えやすくしました。

「正しい知識を正しく理解させる」という路線を、教師のアイディアで変えてみました。「気付いた生徒」が主人公になるという設定が、課題に合って、生徒の学習が一気に活性化しました。

Q23を受けて 実践例

教科・領域を越えた研究

― 主体的に生きる児童の育成 ―

小学校の授業研究で教科や領域の壁を越えるためには、どうすればよいでしょう？

Point

授業研究では、教科や領域の違いにより研究が深まらないという意見があります。教科や領域の壁を越えるには次のような方法が考えられます。

① 授業の指導方法や理論研究を中心に据えるのではなく、指導法による児童の育ちに視点を当てる。

② 授業研究の基盤として日常的に教職員のコミュニケーションを増やすよう努める。

③ 授業参観チェックシートを活用するなど、印象論や感想論にとどまらない議論がかわせる工夫をする。

児童の育ちに視点を当てた研究

校内で研究する教科や領域が分かれていると、多様な視点で児童を見取り、そこから浮かんできた課題をそれぞれの方向から支援、指導することができ、知・徳・体のバランスのとれた児童を育成することができるというよさの反面、互いに進めている研究の方向が見えにくく、研究協議が焦点化されず、深まりにくいという課題が見られます。そのため、全教科に共通する研究主題を設定することで、教科や領域の壁を越えた授業研究を実施することができます。また、授業を参観する視点として「児童が意欲的に活動していたか」など児童の育ちに視点を当てた項目をあげることにより、研究協議が焦点化されます。

日常的に教職員のコミュニケーションを増やす

研究協議を深めていくためには、授業研究の基盤として、日常的に教職員のコミュニケーションを増やし、研究授業のすそ野を広げておくことが大切です。児童のマイナス面ではなく、目指す児童像に照らしての具体的な場面やその手立てなどを常に交流し合うことが大切です。日常的に話し合うことにより、一人一人の児童の育ちについての共通理解を深めることにつながります。そのためには、意図のある職員室の机の配置などの工夫が必要です。

授業参観シートの活用

研究協議では、どうしても印象論や感想の交流会になりがちです。授業参観シートを活用することにより、授業の課題を明確にし、深まりのある研究協議を行うことができます。授業参観シートには質問や課題点を表記する欄を設けます。最初は、授業者や評価する側にも抵抗感があると思われますが、研究を深化させたり、個々の授業力を伸ばすためには有効です。

３つのブロックを融合させる研究体制例

研究主題

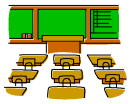
- こころブロック
- からだブロック
- まなびブロック

学級づくり
- ＱＵ検査の活用（実施→分析→方針→実践）
- 学期初めを中心とした構成的グループエンカウンター（ＳＧＥ）の活用
- 学級活動（一人日直、一人係活動）
- 道徳教育
  全国版…心のノート
  京都版…京の子ども
  明日へのとびら
- 特別活動（集会活動、委員会活動）
- フレンド遊び（異年齢集団での月１回の遊びや交流会）

授業づくり
- 授業スタイルの確立（話す、聞く、読む、書く）

日常的な取組
- 朝読書、読書の記録
- お話タイム
- 朝ランニング
- 全校音読
- 読み書き検査の実施
- 家庭学習

学習環境整備
- 学習コーナー
- 自作遊具、教材



家庭との連携
- 基本的な生活習慣の確立
  （「早寝・早起き・朝ごはん」）
  全校で統一した生活チェック表の実施
- 朝読書での読み聞かせ
  （保護者のボランティア活動）

生活チェック表

1月…生活（あいさつをしよう。目標をもとう。）体力（冬の遊びを工夫しよう。）

ひとみキラキラやりきり表 名前（　　）				1/21日 月	22日 火	23日 水	24日 木	25日 金	28日 月	29日 火	30日 水	31日 木	2/1日 金	家の方から
学校でやりきること	1	あいさつ	大きな声で「おはようございます」のあいさつをした。											
	2	返事	大きな声で「はい」の返事をした。											
	3	生活	げたばこのくつをきちんとそろえた。											
	4	給食	給食をのこさず食べた。											
	5	はみがき	昼にはみがきをした。											
	6	言葉づかい	ていねいな言葉づかいをした。											
	7	わすれもの	わすれものがなかった。											
	8		黄帽をかぶって登校した。											
	9	学校のきまり	学校にいる時，名札をつけていた。											
	10		ろうかや教室で走らなかった。											
家でやりきること	1	早ね	（　）時（　）分までにねる。											
	2	早おき	（　）時（　）分までにおきる。											
	3	朝ごはん	朝ごはんをのこさず食べた。											
	4	はみがき	朝と夜にはみがきをした。											
	5	テレビ(ゲーム)	（　）時間まで（2時間以内に設定）											
	6	あいさつ	進んで「おはよう」のあいさつをした。											
	7	手伝い	家のお手伝いをした。											
	8	わすれもの	明日の学校の持ち物を準備をした。											
	9	家庭学習	（60）分間は，つくえにむかい学習（読書）をした。											
	10	音読	はきはきと，大きな声で読めた。											
			まちがえずにスラスラ読めた。											
			れん習した回数（回）											
			家の方のしるし											
			先生のしるし											

ふり返り…

教員の声

成　果

◆　授業参観シートを使うことにより、児童の具体的な活動や発言に視点がいくようになり、話し合いが焦点化されるようになった。

◆　全校で、朝ランニングや朝読書、生活チェックシートに取り組むことにより、教職員が同じ方向を向いて、児童の育ちを支援していくことができた。

◆　それぞれのブロックの積み上げを融合させ、教職員が共有することにより、知・徳・体のバランスがとれた児童が育ちつつあると同時に、教職員個々の指導力アップにつながった。

実践のポイント

抽象的な表現になりがちな研究主題を具体的な取組や児童の行動の様子として表すことで、全教職員の共通理解を図り、教科・領域を越えて協議することができます。

ヒントボックス

全校体制で児童の基礎・基本となる力をつけていくことは、学校としての力、学校力につながります。

Q24を受けて 実践例

教科の壁を越えた研究主題(1)

― 生徒の学びや活動を中心に ―

教科共通の取組を入れた授業研究実践例

研究主題

「協同的な学びの推進」　指導方法、教材等の工夫

具体的な取組内容

・校内研修会を通して、「協同的な学び」のイメージを共有化
　…　外部講師等による講義、学習会など
・教科部会で「協同的な学び」の実践プランについて検討及び実践例の交流
　（各自で作成した実践プランを検討する場）
　…　作成　→　実施　→　修正　のサイクルの確立
・「協同的な学び」の視点での公開授業（全職員参加形式３回）、事後研の実施
　…　視点の共通理解及び、指導方法の多様化を図る
・全教員が「協同的な学び」の視点で公開授業を実施
　（※「授業参観シート」を通して交流）
・生徒の意識変化の調査・検証
・全職員のアンケートにより「協同的な学び」の実践を検証

※「授業参観シート」

「協同的な学び」授業参観シート
授業者　　単元名
公開授業予定（参観した学級にチェック）

チェック	月日校時	学級	チェック	月日校時	学級

１「協同的な学び」にかかわる本時のねらい（授業者が記入）

２本時の視点

授業観察の視点（授業者が記入）	コメント	改善案

３授業構造についての評価（「本時のねらいにかかわって」）

教員の声

◆　全教科で取り組んだことにより、全教員の共通理解のもと、同じ方向で実践を進めることができた。（校内研修会を軸に実践の交流や検討を行うことができた）
◆　「授業参観シート」を用いて参観の視点を統一したことで、他教科の教師も参観の意識が高まり、意見の交流がしやすかった。
◆　他教科の実践から学んだものを、担当教科の実践に生かすことができた。

実践のポイント

研究主題を具体的な取組や生徒の行動の様子として表し、それを「授業参観シート」を通して交流する。それにより、教科を越えて全教員の共通理解を図り、協議することができます。

ヒントボックス

具体的な取組や参観の視点は、実践を通して絞ったり修正したりする柔軟性を持って進めることで、より実態に即したものになっていきます。

また、教科部会を機能的に行うことが大切です。（教科担当が１人の場合、複数教科をまとめて実施するなどしてもかまいません。）

Q24を受けて 実践例

教科の壁を越えた研究主題(2)
― 特別支援教育の考え方や手法を用いて ―

生徒の理解や習得などを中心とした研究

Point
　教科の壁を越えて生徒の理解や習得などを中心とした授業研究を深めるには、Q24 で示された①及び②に加えて③のように特別支援教育の考え方や手法を用いる方法も考えられます。
　①　生徒理解や習得などを中心に据えた授業研究会にする。
　②　全教科に共通する研究主題を設定する。
　③　特別支援教育の考え方や手法を用いて、すべての生徒が「わかる」授業づくりを、それぞれの教科で研修し、交流する。

全教科に共通する研究主題

「全教科におけるコミュニケーション能力の向上」など、より具体的に生徒の行動として見える状況を目標として示すことで、取組内容や研究の成果等について全教科の教員で話し合うことができます。生徒の変容が見える・わかる研究が、授業研究を深化させながら継続していくことにつながります。

例

教科における国語力の向上 → ・全教科において、「コミュニケーション能力の向上」をはじめとする国語力の向上に視点を置いた授業を行う。

一人一人の児童生徒が「わかる」授業づくりの研究

　全教科に共通する研究主題で授業研究を進めることともに、特別な支援を必要とする生徒に焦点を当て、その生徒が「わかる」授業づくりに全教科で取り組むことにより、全教員による授業研究を深めることができます。
　そのためには、どのように生徒を支援するのか、そのポイントを指導案にしっかりと明記して指導にあたることが大切です。そうすることによって、授業へのかかわり方や理解の程度、学習の定着度、支援の方法など一人一人の生徒を観察する視点が明確となります。その観察した内容を分析することによって生徒理解が深まり、支援の在り方が明確になって指導方法の工夫改善を図ることが容易になります。工夫改善をして臨んだ指導の成果と課題を全教員が交流し合って再度分析・改善を行うことにより、より一層授業研究が進み、児童生徒一人一人が「わかる」授業づくりを進めることができます。

Q25を受けて 実践例

隠されたベテランの技を 若年層の育成に生かす（小規模校）

例１「職員室も若年層の育成の場に！」

本取組のねらい

本校教員の潜在能力を引き出しさらに向上させるとともに、若年層への日常的な指導によって、全校的な指導力の向上を図る。

授業・行事の計画進行を学ぶ

・本校教員のもつ指導力を「技・知恵」という形で聞き出す。
・実行したことをもとに振り返り、日常的に指導の改善に生かしたり、校内研修の素材として活用したりする。

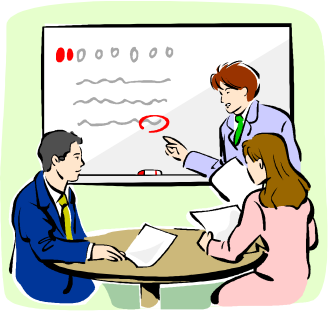
日常の学級経営から学ぶ

・本校教員がこれまでの実践の中で身に付けてきた様々な指導法やちょっとした工夫等を引き出す。
・若年層が、日頃の指導の中で悩んでいること、困っていることを引き出す。

キーポイント：
学年を越えて、連携を強める

実践のポイント

○年度当初の担任人事から若年層の育成に向けて視点をもつ。
○職員室内の配置に工夫し、いつでも相談し合える環境作りに配慮する。



例２「みんなで育てよう若年教員」

本取組のねらい：「授業づくりは学級を変える」を基本に据え、若年教員が授業研究部員として、指導力向上に生かすために、授業づくりのノウハウを身に付けていく。このことが学校全体の教師力向上につながる。

事前研究会１

・児童の実態と教材の特性
・教材の分析
・単元の構成

事前研究会２

・教材分析表の作成
・児童の発言力を高め、練り合いのある授業にするために

事前研究会３

・指導案の検討
・本時のねらい
・児童の実態と発問内容

全体事前研究会

校内研修（授業研究）

・授業研究の実際
・児童の実態
・担任の対応
・授業記録の作成
　１　事後研究会用
　２　全校掲示用

全体事後研究会

若年層は研究部員として全授業研究会に！

　これらの研修・研究会は、ベテランは授業づくりのノウハウを伝達する意図を持って進める。若年教員は教材研究をはじめとした授業づくりの基本を学ぶ。
　掲示用記録は、授業の意図を含めたまとめであり、ベテラン・若年教員で交互に作成する。

掲示用記録

実践のポイント
例2：担当者の実態に合わせ、過度な負担にならないような配慮が大切です。

ヒントボックス
例1と例2とをうまく関連付けて進める工夫も考えられます。

Q26を受けて 実践例

一人一人の意識を高め、チームで行う研究へ
― 研究主題と個人の研究テーマをつなぐ ―

授業研究会に求める個々のニーズ

初任者の私にとって
- 授業を行うことで、課題発見と対応を学ぶ適切なアドバイスをもらいたい。
- 『授業を見る、行うことすべてが勉強』
- 授業を見ることで、発問･板書・机間指導･ワークシート･授業の組み立てなどの授業技術を学びたい。

中堅教員の私にとって
- 『よい授業が見たい』
- 教師力を伸ばすため、新たな課題にチャレンジしたい。
- 自分自身の研究テーマに沿って、実践を深めたい。

ベテラン教員の私にとって
- 自分の実践を伝え、若い先生を育てたい。
- 学校全体の教育実践を高めたい。
- 研究発表会に向けて、成果を形にしたい。

研究の土台づくり

研究の方向性を全員で検討し、共通の土台づくりをする。
- 研究仮説に沿い、どのような実践を目指すのか、何を大切に取り組んでいくのかを明確化する。
- まずは「学ぶ」ことから始め、理論研修、先進校視察などを生かして、より高い目標を設定する。

個人テーマの設定へ

自校の研究テーマと関連させて、自分の特性を生かしながらどの角度からアプローチするのかを、各自がまとめることで、研究に対しての意欲を高め、見通しをもつ。

各自の取組を全校へ発信

教員一人一人の取組

研究授業
日々の授業公開
レポート
等々

学校全体の取組へ

例

研究主題をもとに本年度の研究の方向性を話し合い、焦点化する。
研究の焦点①見通しをもって主体的に活動する力、問題解決の力を育てる単元づくり
②学習の基盤となるまとめる力や話し合う力の育成

A先生からの発信

テーマ『単元構想力を高める。』

児童の興味･関心を高める教材教具作り…子どもの知的好奇心を高める単元構想

『ぴっかり アンテナ君』

伝える場の設定…聞き手を意識し、わかりやすく書きまとめたり、話したりする力を伸ばす。

『自然探検クイズラリー』

B先生からの発信

テーマ『児童の言葉の力をどう高めていくか。』

つなぎ言葉の導入…友達の意見をしっかりと聞き、お互いの意見をつないで話し合うことにより、より内容の深まる話し合い活動を目指す。

○○ちゃんの意見を聞いて、考えました。

「学びあう話し合い」（掲示物）の作成…話し合い活動においてどのような児童の姿を目指すのか具体例を示す。

C先生からの発信

テーマ『学級全員が生きる話し合い活動』

ペア学習･グループ学習を取り入れる…どの児童も必ず自分の意見を言わなければならない場を設定する。

児童相互の学び合おうとする態度を普段から育成する。

書く活動の重視…自分の考えの足場を固めたり、自分の意見に思い入れを持ったりするために話し合い活動の前後に取り入れる。ノート指導を重視する。

作　成　協　力　校

長岡京市立神足小学校
長岡京市立長岡第六小学校
長岡京市立長岡第九小学校
宇治市立北小倉小学校
京田辺市立三山木小学校
亀岡市立安詳小学校
南丹市立殿田小学校
福知山市立惇明小学校
舞鶴市立倉梯第二小学校
綾部市立豊里小学校
宮津市立上宮津小学校
京丹後市立佐濃小学校
与謝野町立与謝小学校

小学校　１３校

長岡京市立長岡中学校
長岡京市立長岡第三中学校
宇治市立北宇治中学校
城陽市立北城陽中学校
八幡市立男山中学校
木津川市立木津中学校
亀岡市立南桑中学校
南丹市立園部中学校
福知山市立六人部中学校
舞鶴市立和田中学校
綾部市立綾部中学校
宮津市立日置中学校
京丹後市立峰山中学校
京丹後市立大宮中学校

中学校　１４校

京都府立聾学校舞鶴分校小学部

府立学校　１校

平成１９年度校内研修ハンドブック追補版

実践事例集

― 授業研究の充実を目指して ―

発　行	平成 20 年 3 月
	京都府総合教育センター
〒612-0064	京都市伏見区桃山毛利長門西町
ＴＥＬ	075-612-3266
ＦＡＸ	075-612-3267
ＵＲＬ	http://www1.kyoto-be.ne.jp/ed-center/
E-mail	ed-center@kyoto-be.ne.jp